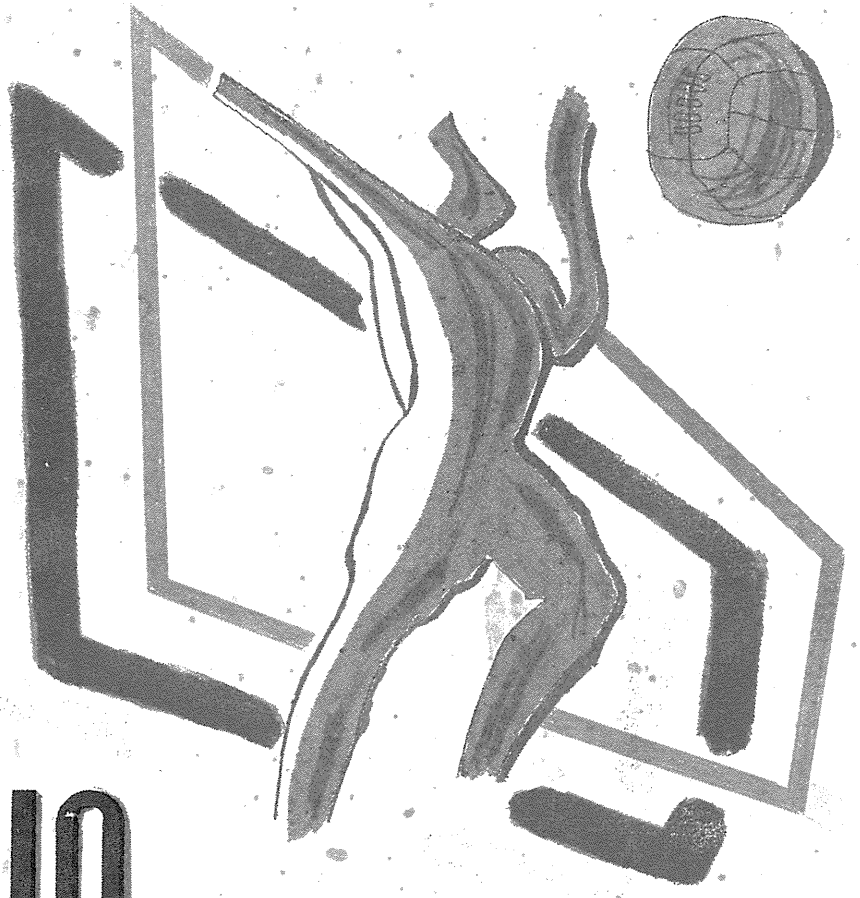
DANH



10

栄光学園蹴球部

DASH

偉人の達した高峰は
一躍地上から達したのではなく
同伴者が夜眠れる間を刻苦して
一歩一歩よじ上ったのである。

（ロバート・ブラウニング）

栄光学園蹴球部

もくじ

関東大会予選から国体まで …… 11期 宮坂研一 1

想い出すこと …… 9期 田畑哲也 2

大いなる敗戦 …… 10期 清水征四郎 7

◇ずいひつ …… 10

13期 渡辺浩 …… 10 新井正夫 11

11期 宮坂研一 …… 12

◇対外試合 …… 14

1、関東大会予選 …… 14

2 国体予選 …… 15

3 中学練習試合 …… 16

合宿日誌 …… 17

現役に思う …… 9期 石原博 22

喫煙室 …… 23

十和田行 …… 10期 全員 25

丹沢登山歩紀之記 …… 11期 宮坂・成宮 44

◇作文 …… 48

11期 宮坂研一 …… 吉川威 48

13期 渡辺浩 …… 相川亮一 50

▷特別寄稿◁ …… 56

〈詩〉 鏡 …… χ氏 56

1961年度（高等学校／中学校）中間成績 …… 58

編集後記 …… 11期 吉川威 59

関東大会予選から国体まで

十一期 前期 主将 宮坂 研一

関東大会予選第一回戦小田高に負けて四ヶ月、皆国体を目ざしてがんばって来た。毎週二回の練習そして合宿を通じて皆はガッチリとまとまった。そして八月一五日から一七日までの練習、それはファイトに満ちていた。18日第一回戦は無事に勝った。ここで伊東がねんざし出場不能となってしまった。第二回戦対多摩、伊東について横川も負傷。このハンディを背負って鎌倉学園と戦った。技術の上では鎌倉の方が上だったかもしれない。しかし栄光はファイトにより勝利をにぎった。国体における第一目標である鎌倉学園に勝って準決勝、湘南高校へと臨んだのだ。しかしみかたのクリヤーミスで一点を先取された。そして後半は前半2対0の後を受けて行われた。栄光は必死の反げきをしたが3点目を取られた。以後気落ちしたのか6点をうばわれ完敗だった。

この大会で自分が知り得た事は実力の差はどの学校も余りなくインター杯に勝つためには練習次第であるという事、そして第二には実力の差はファイトで十分カバー出来る事そして球に食いついて行く事により技術はいくらでもものびるのだ。そして全国大会のためにがんばろう。そして今度こそ湘南に勝とうではないか。

◎中Ⅲに。君等は今が一番のびる時だ。一中のやつもどん〳〵のびている。今度こそ一中に勝ち県下一となるようがんばってやれ。

◎中Ⅱに。君等は一番のびる時だ。来年の県下一となるために練習には一そう身を入れてやれ。

高校も中学もだだ前進あるのみ

ガンバロー

＝おわり＝

想い出すことなど

九期　田畑哲也

ボクの先輩

その一

中三の夏の事だった。夏の大会決勝棄権。半年の間の汗の結晶がもろくも水の泡と化した時のイレヴンの気持ーーー。

そんなある日、部室で云ったものだった。「だってあんなの面白くねえや。練習なんてする気がしないョ。」すると当時高三の目白さん（六期綱島さんー東北大）が怒ったものだ。「だからお前は根性が悪いって云うんだよ、もうどうしようもないとわかったら、ブーブー云わねェで練習しな。」彼はそう云うなりプイッとグランドへ飛び出して行った。決勝棄権という事に甘えていた僕にはその言葉は痛かった。突き放された様な感じだった。しかし同時にそれは僕に新しい見方を教えてくれた。余りにも不合理であったとしても、余りに努力が無にされたとしても、それだからといって努力を怠たる事は許されないと云う事、何故ならそこに残されている唯一の道は努力する事に他ならなかったからだった。

又篤さんはこうも云った。「決勝棄権という事、それは君達にとって逆境とも云えるんだ。そしてその逆境を乗り越えた時、君達はもっともっと強くなっているのではないだろうか。

偉大なる人間の証、困難にあって不倒不屈、　ベートーベン。」

そして一月後、僕達は優勝校片瀬中を熱戦の末破っていた。

その二

「この頃の入試の競争率高いんだろ。そういう試験を受けて入って来た連中はね、小さい頃から勉強／／でくるからすごくスレテルんだよ。なんていうのかな、まあとにかくおおらかな奴は少ないよ。そんな奴が、サッカー部に入ってね、何ていうのかな、人間らしい温かさって言うのかなそんなものを得られる様な部、サッカー部

がそんな部なら良いんだがなあーと思うんだ。」

「ウン、だからね、この頃みたいに勝つ事ばっかり考えるのは良くないんだ。みんな熱心に練習やって、ファイトのある真面目に練習する奴を試合に出せば良いのさ。敗けるかもしれないけど、でもそれが一番いいんだけどな。」

目黒さんの話になにか感激した中三の冬の僕だった。

その三

中学冬の大会決勝戦はすさまじかった。再延長のタイムアップの笛を、「あー、やっと終った」という気持で聞いたのは僕一人でないと思う。

黄昏こめる湘南高校のグランドでの反省会に、僕達の指導をしてくれた篤さん（四期泉頭さん一日立電線）が語った。「この最后の大会も優勝出来なくて残念だった。しかし、君達があれだけの試合をした事、体力の限界を超える迄戦ったという事、あれは君達の良い想い出になるんじゃないかと思うんだ。高校生になって、いや大人になってまでも、この大会を思い出して、『あゝあの時は良かったな。』と感じると思うんだ。」確かにあの時の思い出は、幾度も僕を支える、九期生を支えるなにかになっていた様だ。

そして先輩は続けてこんな事を云った。

「練習は実に熱心に良くやってくれたんだが大会には出られなかった中三の人に、特に文句一つ云わずに中二にポジションをゆずって真面目にやってくれた事に感謝したい。」

優勝劣敗といってはそれまでだが、目立たないそういったプレーヤーに一言言葉をかける事も指導者は心得ておくべきだと思う。簡単な様だが、何故か言えない言葉だ。

立派に敗けること、

負けて悔いない試合。そんな経験を僕は二つした。一つは前述の中学冬の大会決勝戦対一中の試合だった。又一つは高一の時のインターハイ決勝対鎌倉学園の敗戦だった。前者の時は、体力の限界迄走り尽くした試合だったし、後者は強豪の名高かった鎌倉学園に一歩もひるまず戦い抜いた試合だった。共に気力の限界まで、体力の限界まで、技術の限界まで、全力を尽しての試合だった。敵ゴール

を襲ったのが僅か一度という対鎌倉学園の時でさえ、最高のプレイが出来たという誇りがイレヴンの顔に浮んでいた。鮮やかに勝つ事も難しいが、それと同じ様に、又はそれ以上に難かしいのが立派に敗けるという事だと思う。敗戦を喜べるだけの試合、それが出来れば栄光サッカーとして最高ではないかと思う。

民雄さん（七期佐々木さん―東北大）がよく試合の前に言った言葉を思い出す

「試合を終って、あゝ良い試合が出来たなあと思えるだけの試合をしたまえ。」

卵はいつかえる。

一定の温度で一定の日数熱するという条件を与えれば卵はかえる。しかし一定の条件を与えたところで石ころはヒヨコにならない。

何故なら、ヒヨコにかえるという内的必然性が無いからなのだ。

「卵はいつかえる」という疑問を最近僕は感ぜざるを得なくなった。

こゝ数年来の部は、気力という名の栄光サッカー特有の内的必然性を有していた。そして、練習、団結、といった様な外的条件によって立派に勝利という名のヒヨコをかえしていた。

卵が時にかえらない事があっても、この数年心配な事はなかった。何故なら卵である事はハッきりとわかったからだ。又卵かどうかと疑われた年も、思いもかけぬ時にその卵である事を立証していった。

そう栄光サッカーがうんだ卵だ、決して単なる石ころである筈はない。卵はかえる！！　僕は信じたい。

しかし卵はいつかえるのだろうか。

部の主に……

「ナンデモいいから部に入れ！でも入った以上は部の主になる気でやれ。」そんな兄貴の言葉と共に入って六年。O・Bとなった今、現在の中学生に又、同じ忠告をしたいと思っている。それ位の気持がないならば、部員であっても得る所は小さいと思う故に。

優勝旗

眞紅の大優勝旗等というと聞えが良いが、実は橙々色で、南南東

ナントカと書いてあるのがインターハイ西関東の優勝旗であった。しかし中三の頃、部屋の隅にそれがデンとおかれてあった時の感じは、同じ部室の汚なさにしてもズッと見栄えのした汚なさだった。

中三の冬甲府遠征であの優勝旗を奪われて以来絶えて久しくお目にかゝった事が無い。そしてもうあの優勝旗を知らない学年が高校生になっている。早いものだと思う

甲府にて

二年連続代表权を得ようと甲府に乗り込んだ栄光の善戦健闘も空しく優勝旗が韮崎高校に渡された時、一団となっていた韮崎の応援団の一人がこんな事を云って通って行った。「栄光よくやったよ、又来いよ！」当時中三として応援していた僕達は、高二の冬再び甲府のグランドを踏むことを、優勝旗を奪いとる事を心に誓ったものだった。そして四年、僕達の夢はそして栄光サッカー部の夢は毎年毎年、夢と消えて了ってきた。現在の、未来の高校生が僕の、僕達の夢を叶えてくれる事を楽しみにしている。

ダッシュについて、

僕が中二と中三の間でマゴ／＼している頃ＤＡＳＨの創刊号が出された。そして此号まで十冊のＤＡＳＨが出されたわけだ。丁度、僕達九期生がＤＡＳＨと一緒に育ってきた事になる。一面に於ける九期生の生活譜としても面白いと思う。これも案外九期生が積極的に投稿して来た事によるのだが……

最近創刊号をひらいてみた。頴原さん、篤さん、チャーシュー等々、錚々たる先輩の文章が並んでいる。ふと思ったのは、そういった先輩と現在との断層という事だ。そういった断層を少しでもうめるためにも古い号のダッシュから抜すいしてみるのも面白いと思うのだが。

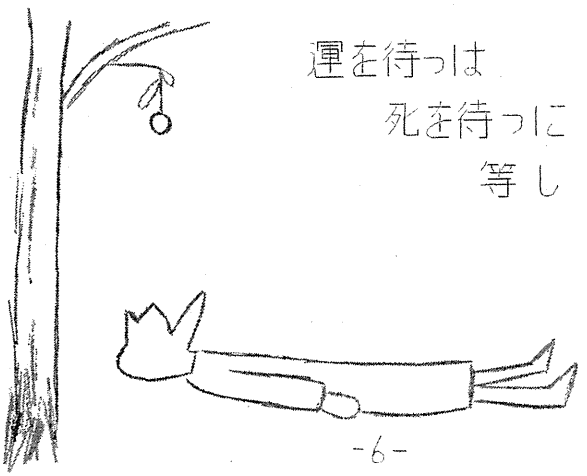
熱戦譜

高校の宿敵は何といっても鎌倉学園だろう。三年前のインターハイ決勝は２－０で二年前のそれは５－０で西関東代表決定戦出場を阻まれ、昨年は三回戦で破れている。この三年の間インターハイは全て鎌倉学園の前に屈したのは何カジンクスじみているが、とにか

くこの国体で学園を4ー2で降したのははスッとした気持だった。又小田高との熱戦も語り草であった。　小田高との熱戦譜は四期生の頃に始まる。0ー1後半押しまくり乍らも逃げきられ、あと三十分あったらとつぶやかせた試合。逆転につぐ逆転で4ー3で振り切った試合。無失点のバックスを相手に果敢に攻め込み、最后三十四分にネットをゆるがして同点にした試合。そして逆転しながらも負傷者続出でゴールを死守しながら逃げ切った試合。「一年に一回は小田高とは対決しなけりやならないんだ。」そんな事もよく言われた。

ライバルを叩け

中学のうらみ重なる宿敵と云えば藤沢一中だが、ちょっと思いつくまゝに書いてみても五年間で一勝四敗という数字が出た。三十二年冬決勝藤沢3ー1栄光、三十二年夏決勝藤沢2ー0栄光、三十三年冬準決勝栄光2ー1藤沢、三十四年冬決勝藤沢3ー2栄光、三十五年夏決勝藤沢1ー0栄光。つまり一中に敗けたために四回優勝を逃したわけだ。余りにも大きな数字だ。鎌倉学園に対するインターハイの三連敗とも何か相通じるものがある様だが、栄光が一面的な攻めと守りしか出来ないという事だと思う。いつも相手の強引なプレーに敗けるという事は考えねばならぬ様な気がする。今の中学が所謂きれい事のパスワークによい意味の荒さを加えた時、バックスの強烈なタックルとかFWの中央突破とか、所謂強引なプレーを加えた時、始めて、一中を下す事が出来るのではないだろうか。



大いなる敗戦

十期　清水征四郎

それは去年の十一月二十三日であった。忘れもしないその日全国大会予選の三回戦で鎌倉に0対2で敗れた日である。

我等十期はそれまで快進撃をしていたのであったけれどくいとめられてしまったのだった。

関東大会までの16連勝などそれは輝しい記録であった。しかし云うまでもなくそれは容易な事ではなかった。皆一致し、多くの苦難にぶっかる度に打ち勝ってきた結晶であった。今でも思い出す関東大会予選第一回戦対慶応との苦戦を。あのひろいざく〳〵とした湘南のグランドでっった足をひきずって走り又その分をカバーしようと皆が努力した事をまったく苦しいの一語に尽きた。それだけに勝利を得た時には非常に喜んだのであった。しかしそれ以前気のゆるみがあったのは事実であると多くの人は認めただろう。それ以後は非常に奮起したのであった。対湘南戦にも2対1の接戦の末勝ち関東大会に出場できたのであった。

本大会第一回戦対日川戦は意外に相手が弱くろ対1の楽勝であった。第二回戦対大泉戦は暑い日に行われた。時間毎にスコアのつくボールドが目に入ってしようがない。試合が早く終ってほしいと思ったからかもしれない。勿論幸運によるところが多っかったと思っているがたゞ早く終ってもらいたいと思う心だけでは絶対勝っ事は無理であった。はたから見てこんな試合はないと思ったかもしれない。事実見ている人にとってはつまらなかった試合だったろう。けれどもそんなコンディションの中で皆苦しい試合を一生懸命やったと思っている。早く終ってもらいたいと思う以上に忍耐とそれこそ自分に対するファイトが必要だった。だいたいにおいて凡戦というのはファイトのない試合が多い―それを凡戦と一般に言うのかも知れない―けれども見るものにとって凡戦なるが故にかえってやる者にとって自分に対する精神力が必

要な時もあると思う。又逆にはたから見て好試合であっても人によっては、やっていて何んとなく物足りなく感じる事もあるのではないだろうか。対浦和西戦を終えた時何んとなく満足感がその時はあったしかしそれは〝浦西〟という名前に対する満足感が大きく作用してすべてがすべて自分自身に対するそれではなかったような気がしばらくするとして来た。

そして十一月に入り全国大会の予選が始まった。一回戦は本戦勝であった。二回戦は多摩高に5対0で勝った。スコアは五月の頃油の乗っていた時と同じであった。しかし今から考えると、いやその時に多くの人が言っていたように何か足りないものがあった。そしてその足りないものが補いきれず三回戦鎌倉に敗れてしまった。本当にくやしかった。何んでそんなにくやしかったのだろうか？全国大会に出場する望みが絶たれた為だろうか。確かにそれもあるだろう。

けれどももし全力をふりしぼり立つ気もなくなっていたならばそんなにくやしいとは思わなかっただろう。一人一人静かに考えてみれば果して自分がその試合にベストを尽したと誇り得るだろうか。

〝ベストを尽す〟という事ははなはだはっきりしない言葉である。

それは自分の心をいっわる為にあるのではない。試合前毎日放課後ボールを蹴っていく事だろうか試合の時にがんばるだけだろうか。いやそうでもあるまい。

言い換えれば負けた時でも勝った時でも何の心残りももたないという事だろうと思う。

しかし今になってよく考えてみると僕にとって安易に得たどんな勝利よりもこの敗戦は貴重であった。この敗戦でいかに以上に述べたように考えた〝ベストを尽す事〟が困難であり大事であるかを知った。と同時に一度のチャンス即ち一瞬というものが二度とはこない貴重なものだと改めてはっきり知った。僕は今でもその時がもう一度来るならば一生懸命心残りのない試合をやってみたいと思う。しかし、もうその時は来ない。けれどもその体験は経験としてこれから先ずっと役立つであろう。

かって僕が高一の時だったと思う〝ベストを尽す事〟とはどういう事かしというような事について discussion（ディスカッション）

をした事があった。そして大部分の者は試合に勝とうとし勝たなければいけないと云っていたように記憶している。僕はその時頭の中で考えた事を何んとか云った。

けれどもこれに対する答をこれらの経験を通して僕なりに理解する事ができた。

部生活は試合がすべてであるとは勿論言わない、しかし試合について考えるならばこの事をこれから試合をやっていく後輩達に云いたい。

〃勝利にむかって努力するのは当然である。しかし、負けたからといって、失望するな！落胆するな！もしベストを尽したと誇り得るならば〃

勝ったからといって高慢になるな！評判に耳を傾けるな！

もしベストを尽したと誇り得ないならば〃

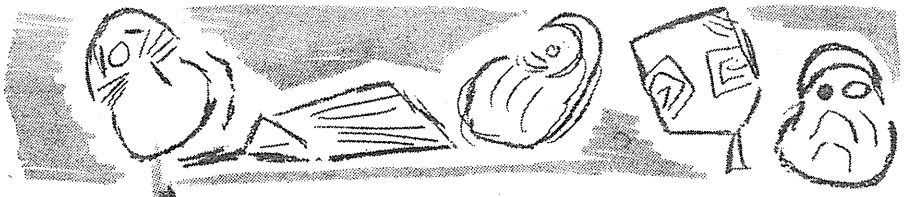
そしてこのようにサッカーを通して得られたものを心にとめ人生の終りに自分が立たされた時ふりかえって見て残念と思う事のないよう生きる事がこの敗戦の唯一でありかつ最大の收かくと云えるように努力したいと思う。

関東大会予選の始まる前、どうも高一高二の練習に対するファイトがないのを見て「この様に苦い経験はもうしたくない。苦しむだけであるから。彼等はわからないのだろうか。いや共に経験した者もいるのに。」と思った。しかし彼等もやはりこの苦い経験をしてしまった。

けれど彼等は全国大会というチャンスがあるだけ幸福である。

彼等がこの経験を生かして全国大会予選には全力をふりしぼって試合ができるように練習を一生懸命やっていく事を祈ってペンをおこう。

傲慢に次ぐは滅亡なり



あいひつ

13期　渡辺　浩・新井　正夫・11期　宮坂　研一

ワンチャン つづり方教室

十三期　渡辺　浩

「ダッシュ」それは表紙にサッカーの絵と思われるものが書いてあり、最后に編集委員の「原稿の集りが悪い！」という文句ののせてある栄光学園サッカー部の不定期刊行物のことである。と私が言った。この「ダッシュ」に何か随筆を書くことになった。　随筆なのだから、随意に書けばいいのである。　そこで次の話を作った。　これは痴楽つづり方教室の続編であって、この中に十三期生の名がはいっている。　すなわち例のジャレである。「ダッシュ」は又教養雑誌なのだからこういうのがあってもいいのである。

私達三人はこのあいだ山登りにでかけました。　中村を通ってから登り始めました。　ぼくが云いました「ああいい天気だなあ。この空の青さんよ。空の青と雲の白がきれいだね」Q君が「ほんとだ。ほんとだ。」と云いました。「おおたのしいと思いましたがその内、道が悪くなってきました。　そこで先頭を行くH君に「穴などがあったら言ってね」とたのみましたところがH君は「そこはくぼたよ」と言ってくれなかったので落ってしまいました。「何んで言ってくれなかったんだ。じょうじょう酌量の余地はないぞ。ろくに知らせることも出来ないのか。この大ばかやろう。」ぼくがそう云ってなぐりかゝろうとしたら、Q君が「けんかはよしだよ。君はあいかわらずやることがあらいね」

おさとが知れるよ」と言って、仲裁にはいったので、まあ、えんやと思ってやめました。頂上についてからQ君が「こわったなべントウ忘れちゃった」と云うので3人で分けて食べました。遊ぶのにもあき山をおりました。帰りに動物園によって、ゾウ、イヌ、イルカなどを見ました。

でした。

次はクイズであります。全部できた方には10円いたぶきます。

新しい漢字（文部省非公認）

1 聞　2 癲　3 鑑

4 瀉

答 (1) ゴーリー　(2) ベンチャーズ　(3) コーチ　(4) 部屋

中三は力ッペ

十三期　新井正夫

カッペといっても中三をけなしているのではないへというのは、私が中三だから）。カッペという言葉は〝極東の範囲〟より広い意味にとれる。本来はイナカッペから来たものではあるが、そこにはファイトと愛敬を感じる。中三のカッペはこのファイトと愛敬であり色々な所で見られる。

対聖光戦の時、終ってから温たかいシャワーを使用させてもらえると決ったとたんのみんなの奇声シャワーの奮い合いなど聖光の生生にひどいカッペぶりを披露した。しかしこのようなことは自分の気持の素直な表現である。また中三の話しているのを聞くと、やたらにきたない言葉やシャレが出てくるへシャレくさいほど）。人によっては悪く聞こえるかも知れないが、それは許してもらいたい。

このように、たくさんカッペの要素を持っている。だからこのカッペぶりのため同じ学年の者にもよく思われてないことが多い。しかし中三のよさは、人に悪い所、よい所を見せることであり、またファイトをも持っていることである。このファイトが出てくる時と出てこない時があるが実際はみんなもっている。だからこそ中三の部員は人にむかってえばることができるほどの団結力を持っている。このファイトや素直さを感じ、それを表面に出してくれるように上級生の部員の人にたのみたい。また下級生の人には中三はカッペだ

と、ばかに心の中で思ってもいいから、よく接っしてみてほしい。中三の良い意味でのカッペ的なところがきっと見つかるだろう。

「雑　念」

「オモシロキカナサッカー部」

十一期　宮坂　研一

サッカー部は今や満九才である。この九月で。私は満十七才であるこの九月で。つまり私が十七マイナス九イコール八才の時、つまり「かえる」をとっつかまえて、六年生の週番をおっかけまわしていたころ出来たのである。私の小学三年の頃。K一が二年の時、中三はまだ一年、中二は六才か五才くらい、中一はまだ赤ん坊の時、佐野大先輩はえらい。まだ御顔を見させていただいたことがないくらい偉大だ。本当に私は佐野さんに会ったことがない。残念である。かぞえて見ると、私がサッカー部に入ったのは五周年目、私のサッカー歴は五年目。つまり、サッカー部歴史の半分を知っている。また初期の部員である。サッカー部はこれから何千年続くか知らないが。

ザ・ファミリー・オブ・サッカー、これはサッカー部員のあいことば、有楽町ならぬ、部室であいましょう。あなたと私のあいことばである。部員はしっかりとこの言葉を胸にきざみつけるべきだ。何故なら、このあなたと私のあいことば、ザ・ファミリー・オブ・サッカーは九年来のサッカー部の伝統であり、特徴であり、ほまれであり、美点であるからだ。オヤジは主将、オフクロは副主将で、KニはオヤジのK次に続くおやじでオフクロの次に続くおふくろで、K一は兄キであり、姉キである。中学生はさしずめやんちゃ坊主。中一は赤ん坊といったところ。これが一体となり、一家をなす。これが一体となり一つの部をなり立たせるのである。

サッカー部員は一人〈〈が家族の一員であるが故に、相互理解がなければいけない。KニはKニ同志K一はK一、中三は中三、中二は中二で相互防衛条約等を各学年の中ではるならば、世界平和いや部内の秩序親しさはぐずれ、ザ・ファミリー、オブ、サッカーは、ザ、エネミー、オブ、サッカー。

つまり敵同志のサッカー部となってしまうのだ。そこにはファイトもない、優勝等夢にも見られなくなる。

又その学年内で理解がないならば、ザ、エネミー、オブ、サッカーつまり敵だらけのサッカー部となってしまう。まずその学年が仲よくなっていくことが大切である

サッカー部員は真の栄光生であるべきである。

サッカー部員は実に真の栄光生真の紳士真のサッカーマンでなければナラナイ。やるべきことは必ずやる。ファイトをもってやる。これこそ、サッカー部員の姿である。その意味において、真のサッカー部員でない者がいることは、遺憾である。その人も、前には真のサッカーマンであったのに。

サッカーマンはよく病気になる。(前の話題と関係ないけれど)つまり金欠病、サイフカタルというやっだ。サイフという蔵物が空になって、ピーピーと音を出す病気。そしてそれにかゝった人は症状として、人にたのむようになる。これはかゝっていない人にとって狂犬病以上に恐しい。そして又かかるやつも決っている。K三が特にそれにかかりやすく、毎月かゝる。そしてスポーツ大会の頃や、休みの練習の頃になると、外に出てくる発作の度合が高くなりひんぱんになる。君たちはよく見るだろう。

「よう、たのむよう。な十円。いいじゃんよ。」

ある時は一番ひどかった。あるラーメン屋で、「おばさん、二円たんないんだけどさ。ネー。いいだろ。」という場面があったらしい。K二にはいつもかかる人が一人いる。又かかっていないくせして、かゝっている振りをする迷惑千万なやつもいる。とにかく金欠病はいやだ。サイフカタルはいやだね。

それにしても中一はどんなやつが入ってくるかな。中三は優勝する気かしら。中二はあれでも練習しているのかい。KOKOは全国大会出る気を持たないみたいだ。心の底には持っているのかな。それにしては、ファイトが少しないネ。おかしいネ。大声で「エイコー、サッカー、ファイト出せ!。」と叫びたいネ。等ったらと考える。頭がおかしくなったかな。(精神分裂症の気味あり?)

今更気付いてもおそいですネ!

対外試合

関東大会予選

対小田原校戦

於・県鎌グランド

五月十四日 晴 キックオフ10.00AM

栄光 3 ― 0
3 ― 1
小田原 4

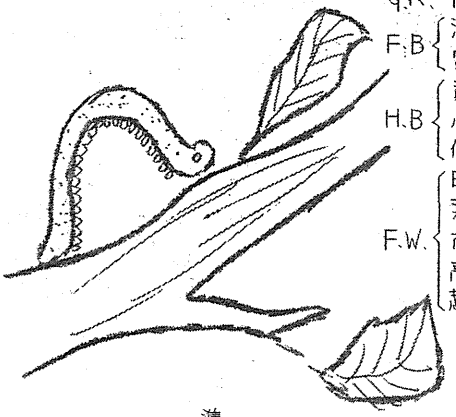
日曜日の朝早く、我々栄光チームは市電の車両と変らない江の電にゆられ、一路県鎌グランドへ。小田校はもう着がえてグランドに出ていた。

キック・オフ・ボールを取った栄光はしばらくおし気味で相手ゴールをおびやかすが再三のチャンスをゴール前でのがす。その後栄光、敵のパスの正確さと自軍バックスのマークの甘さからおされ出しひや〳〵する。遂に十六分敵、LI大野にシュートを入れられ、先取点を取られてしまう。さらに手をゆるめず、小田原は、エースLIを軸にどんどん攻めこんで来て、栄光はおされっ放し。そして一点リードされたまゝ前半を終了する。後半はさらに高三が二、三人加わる、しかし後半もせり合いに勝てずおされ気味。そのうち球がFWへまわると栄光押し始めついに9分CF市村のシュートを敵バックはじく所をRW田島が決め、同点に持ちこむ。さらに12分、市村からのパスをRI佐藤受けてドリブルした後あざやかなシュートを放ち、それが決って逆転となる。しかし、その後バックスの不手際から2点いれられ、再びリードされる。しかし28分最后のチャンスと思えるペナルティを得て、市村が決めて同点とする。(実をいえば、この県鎌のゴール・ネットはひどいもので満足に球も止められない程で、この時も市村のシュートをキーパーがはじき、ネットを素通りして抜けたのを、てっきり外されたものと大いに口惜しがった次第である。)しかしこの同点の喜びもつかの間、本当に最后の最后30分にエースLI大野にバックス、すいすいいぬかれあざやかなシュートを決

められ又もや一点リードされそのまゝタイム・アップとなる。

試合後の反省では先輩諸兄から「休み時間を利用して、基礎をつかむ様に」という事が言われ、我々栄光チームはしょう然と県鎌グランドを去った。

屈するは伸びんがためなり



G.K.　佐藤（改）
F.B　清水　宮坂
H.B　吉川　小島　伊東　宮杉
F.W.　田島　葉山　市村　高野　越智　佐藤（晃）

国体予選

一回戦

対逗子高・於湘南

栄光 3－0 逗子
5－1

二回戦

対多摩高

栄光 5－0 多摩
4－0

準々決勝

対鎌学

栄光 2－1 鎌学
2－1

準決勝　八月二二日(火)

対湘南高校　一五時

栄光 0（0－2、0－4）6 湘南

鎌学に勝ってたるんだのか、栄光ファイトなく動きも鈍い。やや押され気味の中に試合は進み、14分敵RIの蹴ったボール、RB吉川返さんとしたのがゴールインしてしまい、一点失う。今大会はじめて取られた先取点である。その後ゴール近くでフリーキックを与えられるが得点に至らず、逆に敵RWからLIと渡り、決められ2－0で前半終了。後半五分の間に一点をと攻めるが、敵バックスこれを堅守する。そして13分LFのドリブル、CH小島がぬかれ、フラフラ出てきたGK佐藤もぬかれ三点目を許す。更に16分に

は、バックパスのまずさからLIに決められ四点。更に二点たて続けに入れられ、一矢をも報いることできずに試合終了、OB、高三、中学生の応援にも応えられず完敗した。

CK佐藤（孜）
RB吉川・星野
LB宮坂
RH清水
CH小島
LH北村
RW佐藤（晃）
RI市村
CF田島
LI葉山
LW越智

中学練習試合

栄光 2－2 2－0 中

試合には一応勝ったが、ハッキリ言って何となくピリッとしたところが欠けていたような気がする。前半の中頃等それが特に目立った、特にバック。一人がドリブルで切りこんでくると、モタ／＼とさがりながら中途半端なアタック等をしており、その上コンビが全くメチャ／＼になってしまっていた。そのため先取点はゴールライン付近からのシュートで一中に取られてしまった。又二点目はハーフタイムぎり〳〵のところで取られてしまった。この時は、ゴロのしょぼいシュートがキーパの前にいたバックの足の下をくぐって、キーパーの驚く前をコロ／＼とゴールに入ってしまった。これは栄光のバックとキーパーのコンビの悪い事を示している。

しかし、一方ホワードは、前半の中頃一点を取られてから次第に調子をもり返して反撃に移った。そしてジョージと佐藤のシュートで二点を返した。小さなパスはマアマアというところだったが、ウイングとセンター、ウィングとウィングの思い切ったロングパスがさっぱりなかったのは残念だった。一中のパスを見ていて感じたのはパスが非常に早くて鋭いという事だ、その点栄光はちょっと持ちすぎるようだった。ドリブルでぬいて行くのはかまわないが、パスをしなければならない時には、早く正確なのが望ましい。

後半、バックスは割合コンビがとれていて零点におさえた。

ホワードはジョージへのロングパスが通って、それを佐藤へタテパス、そして佐藤のシュートで三点目を得た。この時ばかりは、パスが見事に教科書通りにできていた。

特に気が付いた事、

。バックスードリブルで切りこまれるとすぐにコンビがくずれてしまっていた。
。ホワードのロングパスやバックスのスライディング等の思い切ったプレイがなかった。
これは一中との試合というわけでかたくなっていたせいかもしれない。が、普通の練習のつもりでやれば、できない事はないと思う。
。全体的にタルンでいた事
ぬかれたバックがそのまゝそこにボサッと立って見ているような事があった。
これ等の点を改めていけば、もっともっと中三は強くなる。
―終―

合宿日誌

7.20～7.25

七月二〇日
いよ〳〵合宿である。皆は大きいカバンに何かをいっぱいつめている。七時までに皆集まった様である。だが、校庭にはまだマット毛布、カヤ等が干してある。三～四人の者はマットを教室に入れたりしている。しかし、他の高一、高二の者は何をしているのだろう。まだ着がえていないのかも知れない。それにしても自分勝手である。マット、毛布等を教室に入れなければ何も始まらない筈なのに。
これから先が思いやられる。
明日から、いや今夜からでも自分勝手はやめて協力しなければだめだ。今年の合宿は失敗になるかも知れない。協力してゆこう。
（十二期伊東）

七月二一日（午前）

いよいよ合宿最初の練習が始まった。前々から激しいときいていたが、それ程でもなかった。しかしバテた。特にトライアングル＝パスの練習がバテたがこれを体得すれフォワードの得点力も、大分ますだろう。まだ練習中ファイトがないように思う。この合宿が成功するようにがんばろう。午後の練習にも休みを作ってほしい。

（十二期　越智）

七月二一日（午後）

午後の練習終了が七時過ぎで、飯を食う予定が大分狂った。ところでその飯のまずい事、わずか15センチ程度のサバの煮つけと、枝豆、タクワンだけである。大前さん等は梅ぼし一つですませた。大体今日の飯代を計算すると、どう見ても一五〇円にはならない。きく所によると、これからもこんな状態が続くそうである。今年は、「S屋」と称する店がつくっているそうだが、来年度はもちろん手を切るべきだ。二度とこの悲劇をくり返してはならない。

ミーティングは、練習内容と飯のまずい事について話しあったがそのあと各学年の和とKⅡ・KⅠの自主性について討議があった。これは我々が是非とも考えて見ねばならない事で、これからもこういう事についてのディスカッションはどん〳〵開くべきだ。夜は力々をつっているにもかゝわらず、力が多くて困った。

（十二期中川）

七月二二日（午前）

昨晩は俺んとこには一人用の蚊張が来たので、何か殿様気分で面白かった。おまけに一匹のモスキートウもこなかったので楽に寝られた。気分よすぎて六時頃に目が覚めた。

朝飯前におにぎりを三つ食べたので、朝のまずい飯は食うまいと思っていたが知らず〳〵に食べてしまい、午前中の練習はちょっと歩くと飯が一粒出て来そうで、大層弱った。おまけに昨日の練習の最後のダッシュで、我輩はタフな者であるとの誤解のもとに田畑氏が、我輩をずっとつきっきりでしぼってくれたから、もう一回呼吸するとものすごく何か鉄の輪で者をしめつけられたような気持がして、息がしにくかった。

（十二期怪人）

七月二二日（午後）

大体前の日と内容は同じだったが、クリヤーは全くバテた。ピンチキックと同じ位の激しさである。オイサンがにくらしくなっちまった。センターリングはっこむと太陽とボールが重なってみえない。全く困った。そのうえセンターリングは左からなのであがりもしない。ゲームは内容不明（見てナンダ）

夜はバルサンをたいたため、蚊がいなかった。バンザイ、ではこのへんで、　アーバテル

（十二期樋口）

七月二三日（午前）

暑かった。練習内容はいつもの午前中のとうりと変わらない。ヘッティングを立ってやったのがちがうところである。全体に動きがにぶい昨日の練習のせいか、ファイトがもっとあってもよい気がする。特にあのラウンドキックだとかサイドの時などは、自分を引きしめるためによいと思う。ピンチチックの時もっと、O、Bから声がかかったら必ず声をかえすぐらいの気持が必要ではないのか。ダッシュがない、つかれていたらそれなりにくいっけばよいが、行いにファイトを出している事は、先輩に対して絶体によいことだろう。それとK2で今日の午前の練習にでたのは、田と研とケタムラとオレしかいないし、ケタムラもなんだか。ちょっと淋しい、もっと張りきろう。

又ピンチキックの時だが、ピンチキックしているやっに声をかけてやろうではないか、O、Bの声だけでは頭にくるし、声をかけてくれると楽になるだろうから、O、Bが合宿の主体だがK2へキャプテン）がもっといろ〳〵なことをしたほうがよい。というのは、これからの全国大会への練習・2・3ヶ月の間、高校の中心となるためにも。

それともう一つ。

黒板には個人々々しっかりした目標、体力、技術とある、これはみんなはっきりと暗気する位にみたと思うが、目標をみんな持っているのか!!技術向上も必要だろう。体力養成も又必要だ。合宿は年一回KIとして、KIIとして一回しかない目標をもたねばいけないと、研が二0日のミーティングで

言った。今年は重要な年であるから、KⅡ、KⅠとも自覚を持って、その目標に到達すべく、がんばれよ。

この頃、自分勝手が目立ってきたぞ。合宿では協力が大切なんだ！自分より他人のことをもっと考えろよ。

朝、早くおきたからといって、さわぐな！

（十三期小島）

七月二十三日（午後）快晴

今日の新しい練習種目は「三対二」、これは従来の三対一を改良したもの。しかしちがう所はFW、BKとも球を奪ったのち自分でもープしたりフォワードなカサ型にならず一直線になる事など。全般的にこれはうまくいかないので明日からは普通の三対二をやるとのこと。ランニングは昨日に劣らずたいへんなもの。試合は予想に反して現役が二ー0で勝利をえた。この試合ではRH清水が左へ逆さいを振っていたがまだ受けとる側へ廻（智高野）はなれないせいかOB側ハーフ及びバックにとられていた。これは練習しておくと密集しやすい試合には有利である。LHもこれを大きく右に振るとよい。怪人はまだLWに動かされている感じ。もっとはっきりと自主性をもつべきだ。メシは相変らず悪い。つかれてもあと二日だ。がんばりましょうぜ。

（十二期　伊藤）

七月二十四日（土）

朝起きると体がきわめてダルイ。皆もダルイようだ。ダルイと当然不愉快になるから、部室でも皆いろいろ文句をいう。その一つは、部室の掃除と球入れの関係がうまく行っていない事。本来は掃除をしていない者が、球を入れるはずなのに、ある者は何もしないでいるが気をつけていたゞきたい。練習ははたして苦しい。ヘッディングは時にひどく、OBが他人の頭へおでこしだと思ってガンガン球を投げてくる。頭はいたいなんてものでなく、涙がボロリ〳〵とたれた。ピンチキックにつかれた事はいうまでもない。OBはもう少し積極的になってほしい。確かに合宿は現役のためのものであるが、OBは一応その現役の指導者なのだから、練習中自分自身ももう少し疲れ苦しんで欲しいものである。飯は今日から店が変ったそう

だが前よりは良くなったが、昼のトンカツはあぶらばかりでうまくない。今もあぶらくさいゲップが出ている。午後の練習はさぞバテルだろう。

（十二期　中川）

七月二五日

合宿の練習は午後しか出席出来なかったが、自分には案外きつかった。KⅢといってもKⅠKⅡの時はケガをしていたので、初めての合宿だったかもしれぬ。合宿は技術的面だけでなく、精神的面にも大分意義があると思う。とくにいっしょにねたり、食ったりすると自分の地を出すとともに他人をよく知ることが出来るからだ。また団体生活の中では、個人の考えがやるされないという事も大切なことだ。合宿は一応成功に終ったが、反省会にでた事もよく考えてこれからの大事な部生活を、来二の合宿というつもりでがんばってもらいたいし、いきたい。

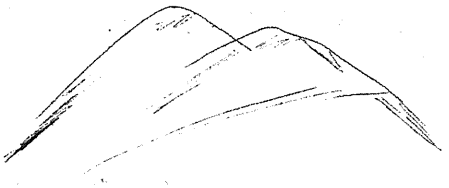
（十期　市村）

合宿をふり返って

この合宿を見ると――。マアー応成功であったといえよう。高校部員は一人をのぞいて、全員参加し、練習にキファイトがあった。バックのコンビも出来て来たし、位置のとり方など技術的にものびて来た。しかし、反面高二が高二たるだけの、合宿をもり立てるというものが少なかったとも言える。

この合宿を一つの機会として高二、高一ともがんばってゆこう。理想に走らず、着実に自分たちの実力をのばし、利己主義をすてて、広い視野を持って、高校、中学を同等に指導していこう。

（宮坂）



現役に思う

9期　石原　博

合宿前にOB連中と今の栄光チームを強くするには何が必要かを話し合った。バックスは①ピンチを長びかせない大きなキック ②堅いマーク ③ロビングボールに対する確実なトラップ フォワードは①ゴール前の突っ込み ②トライアングルパスの正しい概念をつかむ事 とまとめる事が出来る。

これを合宿の目的として練習計画をたてた。最も基礎となるサイドキックは毎日二十分やった。ラウンドキックはどんなボールでもダッシュして大きく飛ばす事を要求したが、見ていて歯がゆい程成れなかった。バックスのピンチキックも毎日やった。一人五分近くやるのは相当きついが、いくらバテても一度ボールに追いついたらもっとしっかりしたボールを蹴り返えす力強さがほしい。そうすればゴール前の混戦を招く事がズット少くなる。千後の八ーフラインからのドリブルシュートは実戦向きで良い練習である。反省会で、ボールに対する執着がないといわれていたが、この練習はそれを力バーするのに役立という。 センターリングの練習はFWに限らずヒネリ、突っ込み、トラップ、ヘディング等が綜合的にやれる。ボールを落とす場所が一定してきたら、ひとまず成功だろう。毎日の練習の最後に十五～二十分ハーフのゲームをやった。サッカー常識が不足しているために位置の悪い

事が多かった。チーム全員がサッカーをもっと知る必要がある。OBチームに入った現役が活躍したのはまわりのOBを信頼して、思いきって自分のプレーをする事ができたからである。レギュラーのメンバーが互いに負担をかけず、信頼し合ってプレーできたら今の戦力も三割方増すと思う。サッカー常識を増すには、良い試合を多く見る事だが、ボールの行方ばかりを追わず自分と同じポジションのプレイヤーがボールの動きに応じてどんな位置をとっているかを見る事である。そして、自分で実際にやって見る事である。中学はもちろん県内の高校サッカーは、基礎技術の優劣とファイトの差で勝負がきまる。

ガンバッテ下サイ。

▽ジュース一杯五円ナリ

八月末の中学校の練習の時、中三、高二のガメツイ連中が、氷とシロップを買って来ました。

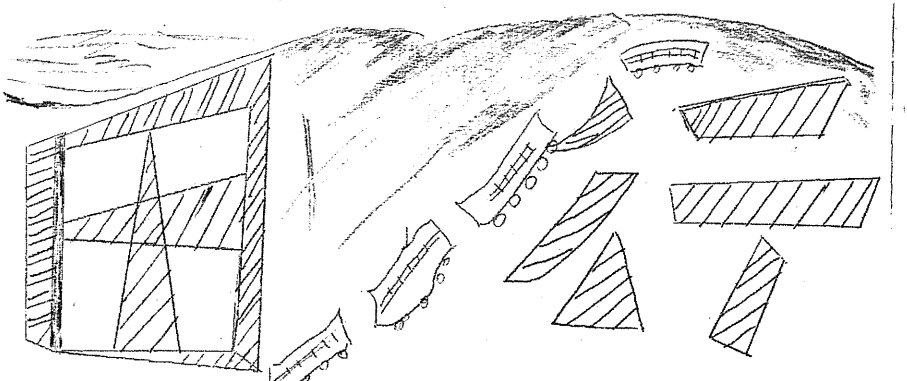
皆に飲ましてやるというので、珍らしいこともあるものだと感心したら、さにあらず、牛乳ビン一杯（約一、八dl）を五円で売るというのです。しかし、幾人かは暑さに負けて、これを飲んだので、彼等は立派にもとでを取りもどし、自分達も十分に飲みました。これに味をしめた彼等、その後もやりつづけました。もうけはいかほどであったやら……。

▽「キカイのことなら……。」

創立記念祭への参加が決まり、早速田島氏から係の割り当てが発表されました。そして怪人は葉山トン平氏と共にテープ・レコーダーの係に任命されました。すると自称英語と機械に強い彼氏よせばいいのに「よしゃ機械のことならまかしとき！」。間髪を入れず田島の曰く「あゝ、機械調整はトン平がやるから、怪人は持ち運びだけすればいいの。」

▽「合宿にて」

合宿も半分をすぎるとみなあそこがいたいここがいたいと言いだす。前記怪人少しもつかれを見せなかったが一応みなにつきあって「おれはここをぶんなぐるとイタイゾ。」聞いてるこっちは泣けてきちゃうね。



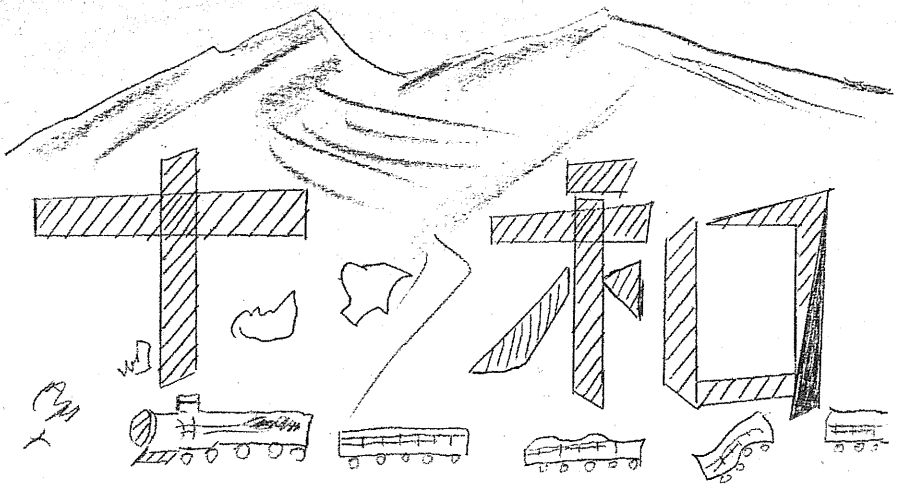
十期生修学旅行

百聞は一見にしかず。

夏休みも残り十日となった八月二十七日夜、上野駅に集合した我々十期生は愛する故郷を後に急行「男鹿」にゆられて東北旅行に出発しました。天候には恵まれ、佐藤が右足指骨折白でピッコをひいていた以外は全員快調、思った以上に美しく清らかな十和田の湖水、蔦温泉の天然水洗便所、松島の絶景（？）……に各人各様の思い出を作って九月二日夜無事帰ってまいりました。ではその六日間の様子を十期生十六名全員の寄せ書きでみなさんに御披露しましょう。

『男鹿』『秋田』

二十七日午後六時半、長年住みなれて勝手知った上野駅の待合室附近に集合、二十分ほどおくれた急行『男鹿』の前二両にとじこめられて満月の東京を後にした。夜行列車なので見えるのは、たんぼと畑だけ、そのうちに寝るために窓を閉めたので興奮と暑さのためどうも寝られない。那須野、白河郡山、福島……どこまでいってもだめ、そのうち寝てるやつの鼻でもつまんでやりたくなったけれども、ぐっとこらえて……どうも寝られない。次は米沢だなと思っているうちに目がさめたら米沢。「サワテな？」と思って時計をみると一時間半ばかり寝たらしい。外は時々小雨で、前日は雨が大分降ったらしく川が増水していた。秋田着朝八時半、乗り合えの都合で一時間自由行動、秋田は秋季団体の準備に大わらわでいろいろ工事が行なわれていた。特に変ったこ



とはなかったけれども、大通りからはずれて市場みたいな所に入ったらさすが東北だという実感がせまってきた。とにかくこの辺の人の話は内容がちっともわからない。

「このリンゴいくらですか？」

「××××四十円！」

「エッこれ一つ四十円ですか」

「○○△××××」（となりのかあちやんと思しき人との会話）

「百グラム×××四円だから一個は×××七円××」

「それじゃ四個ください」

「ハイ二十円！」

「？？」というような具合でした。

（富野輝一郎記）

二十八日

『秋田ー大館ー発荷峠ー鉛山』

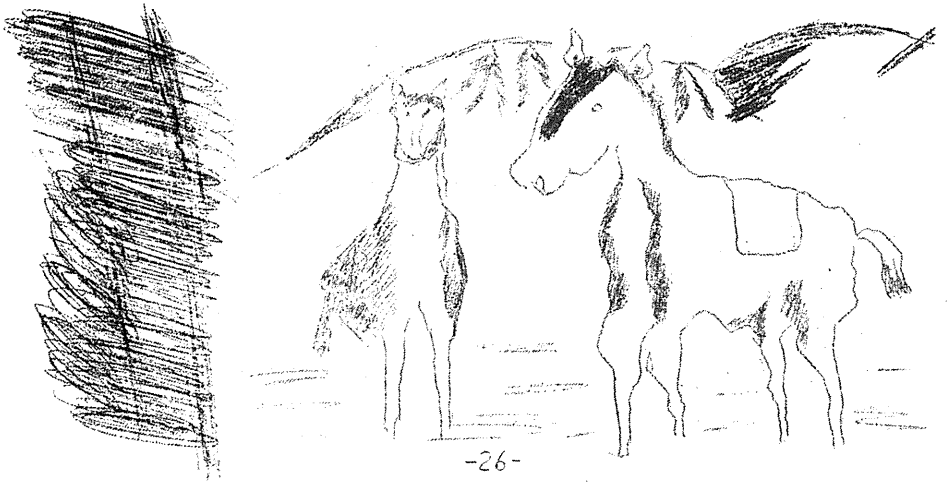
秋田から大館へ再び汽車の旅。この辺は米の本場とあって車窓からみえるものは稲ばかりもういい加減うんざりしてくる。しばらくいくと目の前が開け八郎潟がみえてきた。その向こうにうすく男鹿半島の山々がみえる。しかしそんな景色も束の間また稲ばかりになってしまう。みんな外をみようともせず談笑したり眠ったり、あるいは本を読んだりして気をまぎらわしている。能代からは山が多くなり平地がだんだん少なくなったが、稲は植えられる所には必ず植えてあり、道だけがとり残されたようになっている。そのうち材木があちこちに見られるようになりようやく杉の集散地大館についた。ここからバスに乗りストーンザークル、発荷峠を経て鉛山の十和田

ホテルへ向う。ストーンサークルは石を組んで並べてある遺跡だが墓なのか、それとも何分他のものかよくわからないそうだ。ここの案内人は純粋の東北弁で初めのうち笑いをこらえるのに懸命であったかしまいには、なれて話を聞くようになったが時々わからない言葉がでてきて苦労した。ここから大湯温泉を通り発荷峠に向う。ここからの展望はすばらしくさすが十和田湖一の展望台だけあり雄大な景色をみることができた。目の前に十和田湖が広がっておりその上はるかかなたに八甲田山が見え、右手に中山半島、御倉半島をみることができた。ここからバスはカーブの多い坂を下り、湖畔の和井内に出る。そこから左手に入り鉛山へと進む。十和田湖の水は澄みきって青とも緑ともいえない独特の色をしている。バスは林を抜けいよいよ十和田ホテルに到着した。赤みがかった杉の色がおちついた感じを出している。簡素な旅館である。

（新井光二記）

『十和田ホテル才一夜の事』

我々が十和田ホテルについた正確な時間は確かに忘れた。ただ八月二十八日の夕方近くであったことは間違いない。〝ストーンサークル〟という遺跡で本場の東北弁をたっぷりと聞かされた後、いかにも東北人らしいバスガイドの歌と説明を堪能したので皆至極満足そうである。俺の乗っていたバスには市村、木下、佐藤等が居て後の方で四人で騒いだ。発荷峠からの十和田湖の眺望はまさに俺達を魅了するに充分な美しさを持って



いた。俺は高価なフイルムを惜しげもなくパテパテと十和田の風景に変えていった。フイルムもあの美しい景観を写されて満足であったろう。

ホテルに着いたら女中さんやら何やら総出で誠に心のこもったようにみえる歓迎をしてくれた。下足の番号をもらった。俺のは四番だった。いや八番だったか。とにかく全員〝何々の間〟という所へ通された。俺のは〝鳳凰の間〟という俺の家の物置ぐらいのデラックスな部屋だった。ところがそこで偉大なことが起った。サッカー部が例の習性を発揮しはじめたのだ。何とかかんとか云っているうち、皆誰かしらと部屋を交換してあるいは何のきっかけもなくなんとなく〝紅葉の間〟という所へ集まってしまった。八人用の部屋に十三人、町田と冨野は旅行委員だったから〝白鳥の間〟を出られず阿部は代る人がいないので来なかったからまあとにかく十三人集まった。〝とっつあま〟が検査に来たから許してくれるよう頼んだらOK。そこで八畳に十三人寝る悲壮な覚悟をかためた。

晩飯、みなうれしそうに食べた。飯と女中の顔がまずかった。おかずはうまかった。十和田ホテルは大変に設備の良いホテルだと俺は食堂のすぐ前にワシントンフラッシュ十和田支部のあるのをみて感心した。俺は会員だから飯の後早速顔を出しておいた。

ウルテガサッカー部の集まっているのを見て淋しい顔をしだして、ついに市村・林・大石・唯野は他の部屋にまわされた。大石は真赤になって怒った。最初の晩は俺しものがないので就寝まで相当間があった。皆、遠い故郷の空を想って、思い思いに十和田の美観を顔えた麗文を父、母、はらから、友がき、奥さんへ〈失礼〉に送った。

十和田の月はすばらしかった。暗く、しかもつやのある湖面に、汚れなき影を宿せる満月、湖畔の山々を照らし、水面を照らし、我心をも照らしつくした月。母なる故郷を、異国の空から想わせる月。讃え尽してなおあまりある月に俺は永遠の美をひしひしと感じるのだった。涙の出るほど美しく永遠であった。うるわしき月よ、十和田の水よ、とわにはるかなれ。俺は安らかな眠りについた。

（中前峻記）

二十九日

『十和田湖見物』

久しぶりに畳の上で熟睡したので皆元気いっぱいである。朝飯はこの地特産のワキのおひたしがおいしかった。今日の予定は九時頃十和田ホテルを出発して休屋まで途中養殖場へ寄って約二、三十キロほど散歩し、休屋から船に乗って湖を一周して十和田ホテルまで帰ることになっている。

天気は素晴らしく、太陽がまぶしいがその割に風が冷たいせいか暑くない。ウルチにいわすと、ドイツの気候にそっくりだそうだ。（よせやい。ドイツが十和田に似ているんだろう。）

養殖場では二、三米もある鱒がはねまわっていた。中前が池の中をのぞきこんでいると、突然大きなのが来てパックリ彼の鼻にかみついた。大きな鼻の悲劇！てなことを考えながら養殖場を後にした。

皆でワアワアさわぎながら休屋についた。ウルチが梨を食わなければ生きていかれないと云ったので、梨を買って食ウタ。リンゴジュースも飲んだ。ガメソイ奴等はそのジュースを冷い水道の水でうすめて飲んでいた。そばの人達は「アイヤ、トウチョウの学生は、ナンディホッタラ、ガミッイのかね」てなことを云いたそうな顔で見ていた。ソバもうまかった。月見を食べようと思ったが、後でもう一つ食べられると思ったのでカケにしておいた。こっちのソバはうまい。なにしろ本当のソバ粉が多く入っているから。十二時頃博物館食堂という所で昼飯を食ウタ。

遊覧船に乗る三時頃まで自由時間だというので前からしめしあわせておいた太田と大石と三人でモーターボート（略してモボ）に乗った。大きくて立派なモボだが三人乗ると身動きできない。エンジンはというと二十馬力とみたのは目の違い、ただの二馬力。それでもまったく速い。少なくとも手こぎよりは速かった。二、三分で十和田湖の真中へ出た。さすがは透明度日本外三位だけあって三百米下の底の小石のこけがゆらいでいるのもよく見える。しばらくすると秋田県側についたのでそこでおみやげのリンゴを分ってきた。その間三十一分。軽いもんだ。モボ屋のオヤジに三百円フンダクられ

て失意の三人は湖岸にそって歩いた。湖を見ると中前、信濃がのっているモボが八島等のモボを引っぱっている。しかも中前は大ールでこいでこちらに向ってくる。後で聞くと、中前のモボが最初にエンストをおこしてしまっている所へ八島が来て、助けようと思ったら八島の方もエンストを起し、中前の方はなおってしまったという。なんとまあばかげた話か。

五、六分歩くと有名な『湖畔の乙女』の所へ出た。さすがに多勢人がいる。しかしその像にはがッカリさせられた。美しいロマンテイックな物も想像していたところ、いやはやとんだ食わせもの、。純日本的な、筋骨隆々、十和田湖は二人して掘りあげたというような女丈夫であった。ここで写真を取ると得だと三人でパチパチやっていると、一人のオジサンがやってきて話しかけてきた。チヤキチヤキの東北弁である。二人にはわからなかったらしいが、大学では東北弁を専攻しようという僕にはよくわかった。写真を取ってくれというのである。喜んで取ってあげたがその後が大変。「住所はどちらですか。」「はっ。住所ですけ。青森県南津軽郡……とねげえましょう。」「お名前は。」「今井○太郎とねげえましょう。」「えっなんですか。イメエですか。」「今井です。今井。」「あゝイマイさんですか。」

また湖に沿って行くとウルチが梨を食っているのがみえたのでいってみた。そこはちょうど入江になっていてどこからもみえない。しめたとばかりドブンとやろうとしたが海パンは本テルにある。そこで……。ウルチが「ものは上だ。」といいました。くわしくは太田君に。

時間なので休屋へもどったがどうも冷えてくる。そこでソバを一杯。さて遊覧船『太陽丸』に乗りこんだ。モボより大分大きい。型通り湖を一周。景色は美しかったが冷えてそれどころではなかった。

船が本テル下の船着場に着いたのは四時。皆、船のガイドさんと写真をとっていたがつまらんと思って帰ろうとした。ところがガイドさんが一緒にとって下さいと頼んだからいやだったけれど仕方なくとった。本当にいやだった。ボクはよくこういういやな目にあう。どうしてだろう。いやだなあ。

悪女は鏡を恐む

（松田京司記）

『エネ大会』十和田ホテルにて

例年は作並温泉でドンチャン騒きをするエネ大会も今年は趣好を変えて十和田ホテルでやることになりました。一つには我等のエネを自分達で運ぶことになったからです。これには皆様も御想像のことでしようが、我サッカー部からも大食漢市村君が係として大活躍しました。何しろ彼は胃袋の仕事となると猛烈なファイトが湧いてくるのだそうです。

さてエネ大会の進行係を仰せつかった松田、中前両君の提唱で各部対抗演芸となりましたが、軟庭野球部など好敵手がウヨウヨしていますので、芸達者をもって鳴らす我がサッカー部も油断はできません。十八番の落語劇「道具屋」をやることにしました。リハーサルが大変でした。各部員の特色を生かして全体としてまとまった芝劇にして珍芸術祭参加作品に仕立てようというのですからテンヤワンヤです。主演は例によって例のごとく自称アカデミー賞受賞の中前君です。彼は演技には並々ならぬ関心を持ち、常に台詞の研究を怠たりませんでしたが、こんなことがありました。

相手役「おい住来へ向いて商売しなけりゃ駄目だぞ。」

中前君「ああ住来ですか、オライ。」

こんな駄洒落で済むうちはよかったのですが

相手役「親のスネばかりかじっていないで自分で商売でもしたらどうだ。」

中前君「僕の親父はスネがないんです。傷病軍人ですから。」

さていよいよ本番となりました。舞台は一段高いし、観客は多いしホテルの女中さんも覗っています。皆の心臓はドキドキ、がらになくあがっています。台詞は心なしか震え声です。字ちやんが登場しました。彼は酔払いの役です。例の手つきで踊る姿は大変愉快です。

「月が出た出た。月が出た……」

オイ。そのガ……顔隠みせろ。」彼は中前君の大好きなエリザベステーラーの顔を取りました。その顔はつっかえ棒がないので後の壁ごと買わなければなりません。「珍らしくていいや。」彼はエッテラ、オッテラかついでいきました。

舞台はつつがなく進行していきました。木下君が登場し、抜けない木刀を必死になって抜こうとしたり首の抜けるおヒナ様を買っていきました。帰り際に「グドバイ」と言いました。彼は深夜放送の熱心なファンです。

いよいよ劇もクライマックスです。唯野君と松田君が登場しました。松田君は本場で鍛えられた東北弁を駆使しています。「そこさある鉄砲を見せてべっちゃ。」……

「ほんでいねえ。金だ金。」彼は鉄砲の値段を聞いているようです。

「金はもう鉄に定ってます。」「代だ代。」「台はかしの木なんです。文夫ですから。」相手の中前君にはさっぱり通じません。アクセントガ違うんですな。「ほんでねえ。値だ。値だ」「あゝ音ですか。」一同声をあわせて「音はズドン。」

長かった芝居もようやく終りました。皆我々の素晴らしい劇をみ空には星も輝いています。十和田湖は明日の我々を待っています。楽しい夢でいっぱいの寝床へごそごそもぐり込みました。夜は深々とふけていきました。

（町田昌生記）

三十日

『ホテルー異入瀬ー蔦温泉』

二夜をあかした十和田ホテルとも御別れである。顔なじみになった女中さんがバスの窓越しにテープを渡してくれる。バスの警笛。ホテル前は一瞬ざわめいた。「サヨナラ。」「サヨナラ。」飛び交う声、舞うテープ。木々の緑に五色のテープが映えて美しい。かく

て二日を過したホテルも我々の記憶の一ページをなすにいたった。

緑のしじまの中をバスはひた走りに走る。八月とは思えない涼しい風に頬をなぶらせているうちに観湖台についた。「琅玕の玉をとかしていまだ定らず、何秘めたりやこの湖の色。」と九条武子さんがよんだ十和田は、今、何も語らず千古の神秘をたたえて静かに眠り続けている。その清らかさ、美しさ、それは何者の心をも捕えずにはいられない。あたかもこの世の汚れを何も知らぬみどうごのように。あるいはこの世の全ての富をつくしてもその価には、はるかに及ばぬ美しい宝石のように。今眠りつづけているのである。

さて十和田の幽美を堪能した我々をバスは子の口へと運んだ。ここから石ケ戸まで奥入瀬渓流に沿って歩くのである。バスを降りて皆は三々五々歩き出した。僕と清水は弁当を哲チンに持っていってもらうことにした。奥入瀬は大したことはなかった。もっとも今頃ならあの緑も紅葉して格段と美しさを増していることであろうが。数々の滝を見つつ我々は進む。

途中「松戸農協」と書かれたバスを連らねてオジイサン、オバアサンばかりの団体が子ノ口に向っていった。彼等はすべてニワトリのウラミをうけていたにちがいない。というのは彼等はこのあと子ノ口で昼食に親子丼と玉子丼を食べて中毒をおこし、二人が即死するという事件がおきたのであった。

さてそんなことは我々も彼等もその時は知らずにキゲンよく手を振って別れたのであった。いよいよ昼食というときになって気がついた。弁当は哲チンが持っている。ところが彼は我々と一緒ではなかった。きっとバスガイドとでも後から来るにちがいないと思ったが、どうにもならない。ああ無念。一生の不覚であった。そのとき、市村と林が半分食べろといって弁当を分けてくれた。僕は二人の友情の厚きに感じ入りて大粒の涙をポロリとこぼしたのだった。この日石ケ戸で何が哲チンを待っていたかはいうまでもない。彼の上から三ばんめのハゲはこのとき出来たものと記憶されたい。再びバスで蔦温泉へ向う。快適な振動が我々を夢の世界に招いた。夢からさめて目にしたのは二、三年で国宝に指定されそうな木造の建物であっ

た。蔦温泉であった。

（大石一之記）

『蔦温泉』

蔦温泉到着。デラックスな十和田ホテルに比べるとひどくみすぼらしい。何分片田舎の小学校のような建物である。側に池があって金魚やら鯉やらが泳いでいる。例の自然と入工とが巧みにハーモナイズされたという便所から流れてきたモノがここに注ぎ込まれるらしい。だからだろう、水は濁ってよごれていた。この旅館では部屋でも廊下でもどうも真直ぐ歩けない。どちらかに曲ってしまう様な気がする。何故かと思ったら建物が傾いているからである。少々オーバーかもしれないが。おまけに北寄りの部屋は特にきたなくて薄暗い。蒲団が良くない。今までピカピカな十和田ホテルに肉じ込められていた連中はそろそろ活動開始の時間である。工藤やブルがパイナップルのカンヅメを餌にしてフトンムシのカモさがしを始めた。俺も仲間に加って少々あばれた。藤子をこわした。夜暗くなってから宿からすぐ近くにある大町桂月の墓を見物することにする。墓のそばにウルチをかこんで十人位がたたろして何かやっている。良い年して「人霊」ごっこをやっているのである。ライトを消しても蛍光塗料が青く光る小さな懐中電灯をウルチが持っている。ちょっと離れてみると真暗な中にフワリフワリと浮いて見えるその光はちょっと気味が悪い。俺が力モを探してきておどかすことになった。宿にもどってみるとサッカー部の丁ちゃんがいる。こういう時には落語の方でも我々の方でもお人好しでちょっと何な奴が登場することに決まっている。俺はこのネギをしょったカモを連れ出すことに成功。これからが面白い。墓の所へ行くと丁ちゃんが自分から人霊をみつけたからである。俺の手をぎゅっと握ってふるえ始めた。いきなり「うわあーっ。俺こわい。いやだよう。」と独特の声をはりあげてやりはじめたから愉快である。こっちは適当に一緒におっかながってニヤ〳〵しながらついていったがそのうち何となく彼氏気がつきはじめたらしい。それにさっき俺が丁ちゃんを便所に「せっちんづめ」をやったから疑っていたのかもしれない。それでも「何だ〳〵このやろう。ちくしょう。」とわ

けのわからぬ言葉をわけのわからぬ方へまきちらしながらそろそろ前進しはじめた。そのときのボーッと白くみえるへっぴり腰の彼の姿をみせてやりたかった。とうとう人霊君も丁ちゃんの勇気の前にその正体を暴露。皆で腹をかかえて笑いあった。ウルチもブット御気嫌な夜であった。

その夜は何もすることがなくてつまらないから、向いの部屋の前に「しゃくとり虫」を二匹おいておいた。堀さんが見廻りにきてぐしゃりとやる計算である。色々細工をめぐらして息をこらしてつぶした時の彼氏の顔をニヤニヤ考えながら待っていたがそのうち寝てしまった。翌日となりの部屋の連中が「今日よお、しゃくとり虫が入ってきやがって……。」といって

いたからしゃくとり虫君堀氏にのされずにすんだらしい。

（太田茂記）

『蔦温泉での散歩』

「住まば日の本、遊ばば十和田歩けや奥入瀬三里半」と大町桂月がよんだ歌のとおり十和田に遊び奥入瀬を歩き下って着いたところがここ蔦温泉。十和田の華かさはないが山中に一軒ぽつんと立つ閑かな温泉である。自由時間が与えられ、蔦の七沼をひとまわりしようと例の連中がどこからともなく集ってエネを持って出発した。

なだらかな山道を数分行くと木立を通して眼下に緑色をした沼がみえてきた。四方を不気味な山におおわれ沼の面はただ一つの音立もなく周囲の苔むした木々を映していた。ほとりで一人の英国人

が超然として釣り糸を垂れていた。行けども行けども次の沼らしいものはなく、山道はうっそうとした原始林の中を上へ上へと進んで行った。十分近く歩いたろうか。突然先頭の者が叫んだ。「原野だ」それは開墾地であった。南八甲田の裾野の大森林の中央部を切り開いたあとだ。激しい起伏のいたる所に大きな切株が見える。その間にはクローバーが生え、小牛を含めた数十頭の牛が放れ遊んでいた。旅行中初めて東北を見たという感じだった。激しい風雪に黙々と戦いを挑んだ東北人の努力の成果を見た。クローバーに寝ころがってみた。寒気が身にしみ荒涼さが一段と増してくる。この山奥で二人の土地の人に出合った。一人は老人で夕餉のおかずにきのこを集めていた。見事な東北弁で人間の何年ぶりかに会ったかのような笑顔を浮べて色々と説明してくれた。もう一人は仂きざかりの若者で直径三米もある大木を馬につけ、「オーオー」ととてつもなく大きな声をあげて引かせていた。万葉の昔防人は多く東北人であったと聞くがこのおおしい若者をみているとその剛毅木訥さにさすがはとうなづけた。帰りがけふとみると一軒のバラックがあった。かしいでおり今にも吹きとばされそうである。中はふとんが積んであり、人はみあたらない。入口にあった下駄をみるとなんとそれは木の板に穴をあけ紐を通した即製品である。家のまわりには冬の貯えであろうか魚がたくさん干してあった。僕達は文明と隔離し、人も住まない。この原野で仂く人々の実態をこの目で見て感謝のあまり、持ちあわせのエネを置いてきた。入口の板きれに消し墨で「東京からきました。めしあがって下さい」とかいておいた。帰りの時間が迫ったので道をひき返した。耳を澄ませるとさっき会った若者の馬を打つ声が南八甲田の連峰に響くこだましていた。東北にきてよかったと思った。そして始めて東北を知った。十和田は東北にあるスイスである。しかしこの蔦の原野こそ東北にある東北である。

（林　茂記）

「三十一日

『蔦ー酸ヶ湯ー八甲田登山』

東北特有の朝の澄んだ空気の中をバスは僕等を乗せて酸ヶ湯へと

進んだ。蔦から酸ケ湯までの道は冬にはスキーコースとなる。そして道の脇にはスキーヤの為の標識がはるか五、六メートルもの高さのところに木にぶらさげてある。なんと冬になるとスキーヤーがその標識についた雪を手で落して行くというほど雪が降るそうだ。

酸ケ湯からは徒歩で八甲田大岳に登る。往復約三時間。大岳は高さが千五百八十五メートルで八甲田連峰の中では一番高い。高さはたった　千六百たらずだが北にあるせいか、這松がはえ、三千メートル級の高山植物が繁茂しているのが目についた。頂上では八月末だというのにセーターを着てもまだ寒いというほどであった。晴天のときは北海道、日本海、太平洋を一望できるそうだが今日はあいにくの曇天と濃いガスの為見えなかった。しかし八甲田連峰の非常になだらかな山陵の線がどこまでもどこまでもゆっくりと伸びていてあたかも下界のすべてのものを呑いこんでしまうように見えた。僕はこの雄大な景観にしばし心を奪われてしまった。山を下る途中で雨が降り出したので急な坂道をかけおりて酸ケ湯へもどった。

（矢島守治記）

『八甲田のふもとで』

いいにつけ悪いにつけ何とも形容のつかない便所ともお別れして蔦を出発した。今夜乗る夜行のことを考えると、せっかくの八甲田山に足のけがの為登れないのを考えると、いやそれにも増して我が親愛なる一号車に乗れないことを考えるといくばくかさびしさを感じずにはいられない。それでも雀次、武、太田などと一応三号車に乗り込んだ。

八甲田山のふもとの酸ケ湯までは大した時間はかからなかった。そしてバスが着くと山へ登ぼる者はさっそく出発した。三時間もすればもどってこられるそうである。残された我々はすることもなくバスのまわりをぶらぶらしていたり近所の植物園へ行ったりして時間をつぶしていた。僕はつまらないので一号車のガイドさんへ（彼女の名は片岡美都子という）を誘って近くの芝生の所で腰をおろした。他の二人のガイドさんを呼んだところその辺にいた連中も集ってきたので皆で丸くなって色々の話に花が咲いたということにあい成ったのである。話題はといえば

おかみさん連中の井戸端会議同様多岐亡羊にわたってまとまりはなかったがけっこう楽しんだ。やがて昼になり皆前もって渡された弁当を手にその場から散っていった。

その頃から雲行きがあやしくなってきたと思ったら、八甲田山の頂上あたりから一面山にガスがかかってきたらしい。登った者は見はらしがきかなくてはさぞ残念であったろうと思ふ。とはいうものの下に残った者は皆「ざまあみろ」ということに一致したようである。

これは後で耳にしたことであるが、このあたりを散歩したものが八甲田の名物男「鹿内(しかない)じいさん」に会って話したところ今日は山は必ず雨がふるから登らない方がよいといっていたそうである。不運にもこの御神託がその直後に現実となってあらわれたのだから全く我々この老人に頭をさげざるを得ない気持であった。

この鹿内じいさんは八甲田の主ともいうべき人で八十七才の高令にもかかわらず元気いっぱい。何でもなめくじをみつけると生きたまま食べてしまうとか。胸には旅行者からもらったバッジをたくさんつけているそうである。(不幸にして僕はこの人にお目にかかることができなかった。)

昼食後山に登った連中が帰ってくるまでには時間があったのでめいめいグループを作って野球をしたり散歩したりしているようである。僕も橋次と信濃と一緒に一号車のガイドさんと近くのキャンプ場へ散歩にいったっ話は非常にはずんでとても楽しいものであったが、ここではおもしろすぎるので省略することにする。残念でしたやはりここで何とか行ってもその場に居合せなければ面白いものではない。　特に僕の場合には!!

(佐藤晃一記)

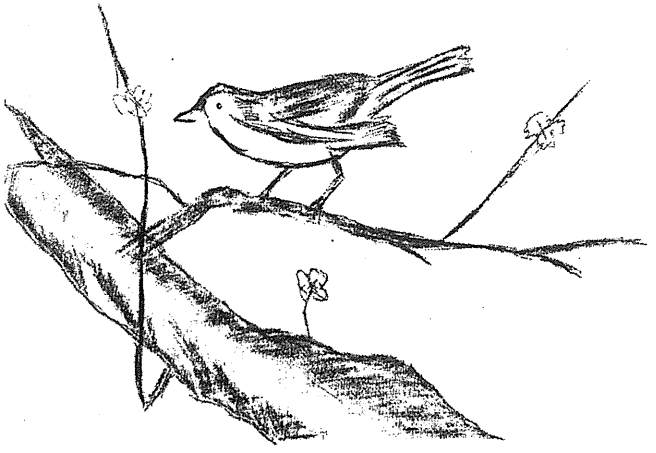
「八甲田ー青森」

八甲田登山の疲れもぬけ切らないうちにバスの人となり一路青森へ向ふ。なだらかな道を下って途中蓬原高原で一時間の休憩。ここは馬を放牧してあるがあいにくの小雨でみあたらない。うまくすればうまに会えるという話だったがサッカー部の連中の多くは馬を見る事ができなかった。そのかわり記念すべき事が行なわれたのである。八甲田の雄姿を眺めながらサッカーをやったのである。皆裸足になりそこらじゅうにある馬糞を

よけながらプレーするかっこうはたとえようもなくおかしい。市村林、清水、武、太田、モリチャン新井それから私は汗をかきかき興じたのである。足の悪い佐藤がそばで見ているのが印象的だった。

さて牧場をあとにしてバスは再び青森をめざして進んだ。つまらない顔をした女の人が歌をうたったり、何か説明したりしている。

峠のあたりで青森の町をみおろしまた遠くその向ふに北海道があるはずの海をながめたりした。まもなく青森駅前の久一旅館へ到着ところがサッカーの疲れが残っているせいかとなりがパチンコ屋だったせいか、私は目がまわって畳にどうと倒れてしまった。ここで晩飯を食って青森市内を散歩する予定になっている。(木下哲朗記)



『青森見物』

バスが青森の街に入った頃は曇った空がほの暗くなり出し旅館で晩飯を食べている頃には雨も降り出した。バスガイドから五時二十分に青函連絡船が出るときいたので急いで出かけた。時間がなかったので青森駅に入るやいなや階段をかけのぼり、かけおり、日本一長いといわれるホームをひた走りに走って汽笛を鳴らして出港する間際に着いた。知る人もいない船に手を振るのもロマンチックなものだった。この時はじめて本州のさいはてに来た思いが起った。駅を出て街を歩き旅館へ戻った。他の連中も思い思いに出かけて行った。汽車中食べるリンゴを買おうと市村、新井、守ちやん、唯野と僕、五人連れ立って集合時間より

甲目に荷物を持ってでかけた。荷物を預け（五人分たった二十円）両側にリンゴ屋の並ぶ小路に入っていった。おばさん一人だけの店の前まで行くと、すごい勢いで「買ってらっしゃい。おいしいから」と少したぢろいだがこれではいけないと「すっぱそうだなあ。」「こんなにあおくてだいじょうぶかなあ。」と口々に言うと、「じゃ食べてごらん。」と包丁で切ってくれた待ってましたとばかりパクツキ、今度は「あの赤いのはどうかな。」といってまた切ってもらった。ここで買ってしまっては「ショボイ」と思いどうにかこうにかそこを抜け出た。そうこうしているうちにそろそろ買おうということになって、おじさんとおばさんが二人いる店に入り前と同じ手口で一番上等なのを食べさせてもらった。ところがお金を払おうとしたとき市村が「あとはもう一軒で買おう。」と言ったので急いで市村をつっつき目で合図をしたがその瞬間店のおやじがジロットにらんだから「マズイ」と思ったが、少しもあわてず何食わぬ顔をして立ち去った次第であった。

生駒さん（七期生先輩）が昔、話してくれた思い出を自分達で経験し、二時間余りの青森滞在を楽しくすごした。

皆が乗った夜行列車はおぼろげな月のもと北上川を渡って一路新松島目指してはしっていった。

（清水征四郎記）

九月一日　『松　島』

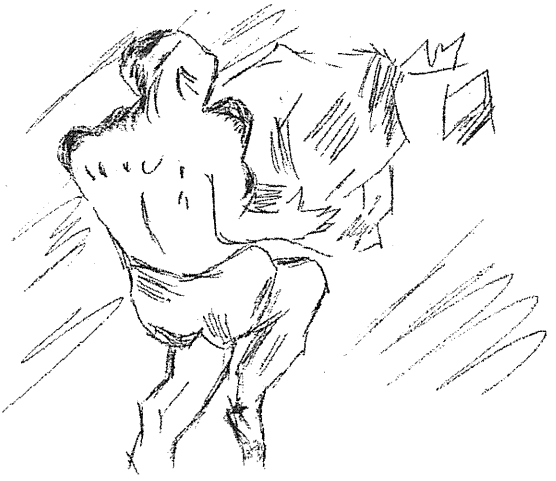
新松島駅についたのは朝五時半頃。小さな駅前広場には三台のバスが我々の到着を待っていた。それに分乗。五分ほどで松島海岸に出た。みやげもの屋の二階に荷物をおいて観光ホテルで顔を洗い、朝食をとった。朝食は大演芸場に用意されていたがこの後でどっかの新興宗教団体が集会をやるらしく、無台の上にはそのプログラムがはってあった。さて自由時間になったので市村、矢島、佐藤、木下、大石、新井、林、清水、唯野と瑞巌寺という寺に行った。アルバイトの女子大生がいていろいろ説明してくれる。

そこを出て松島遊覧船へ乗った快速艇とは名前だけで時速四キロぐらい。スクリューに藻がからまっているらしい。けれども我々に運転させてくれたのでけっこう楽しかった。大石がまずハンドルを

にぎった。前方に橋がみえてきた艇はその下の幅の狭い所を通らなければならなくなった。「おれはまだ生きていたい。」「おれが今死ぬと悲しむ人がいるんだ」「うまくやってくれよ。」「ぶっかったら承知しねえぞ。」でもどうやらうまく通れた。つぎは私がハンドルをとった。この時はさっきより狭い岩と岩との間を通ることになってしまったが皆私の技術を信じ切って誰も不安な様子を示さない。私は得意な気持になって軽々と通ってしまった。海の水はにごりあっちこっちちっちやな島があってとてもきれいだったとは言えない。

十五分ほど乗って遊覧も終った集合時刻である。仙台見物のバスに乗った。

（宮杉　武記）



悪は山の頂より転落する石のごし
幼児よくこれを落し得ども
一巨人もこれを阻止する能わず

『仙台見物ー作並温泉』

仙台の街は森の都といわれるだけあって青々とした木々が完備された道路の端に植えてある。暑い太陽の光の中にすがすがしい緑が目に美しい。東北第一の都市でありながら市の中心部を流れる広瀬川の流れも小合のそれ同様清らかである。バスは一段と緑が濃い青葉山の鋭い坂をのぼりつめて荒城の月で名高い青葉城趾についた。伊達一門の栄華も今はわずかに石垣、石像等にとどめるのみではあるが市民の良き憩いの場所となっている。ここで昼飯を食った。

さてバスは仙台市を離れて最後の宿泊地作並温泉へ向ふ。道は市内と違って悪くなるばかりでその振動は我々寝る者にとっては都合がよい。皆いいかげん疲れていて

気嫌が悪いのでガイドもたいへんところがこの人ラッコイ人で歌を歌えば三番でも四番でも終りまで歌わなければ気がすまないらしい佐藤君にはそれがどうも気に入らないらしく盛んに文句を飛ばす。

いわく「やっぱり十和田観光はいいなあ。ガイドがちがうもん。」彼だいぶいかれたらしい。途中別におもしろい事はなかったが、秋保温泉で火事にであった。といってもバスではなく近所の米屋である。ガイドの説明によれば田舎の火事のこと、消防車はないのでポンプをエンコラエンコラおしてきて川の水で消すそうである。そういえば一時間ぐらいしてからポンプがバスとすれちがった気もする

バスは日本初の交流電車が走った仙山線に沿って進みやっと作並温泉へ到着した。

ここは四方を山にかこまれて静かな所で盛り場などはなくいい所である。（ただし旅館にはバーがあるから注意）そばを流れる川は透明度が高い。ここで本場のコケシを買っておみやげにするのもよいだろう。

（唯野英輝記）

『作並温泉』

昨晩は車中泊であったためか、松島ー仙台ー作並のバスの中では寝ているものがほとんどである。

温泉は仙台の田舎の田舎といったところで静かなよい所である。

宿である作並観光ホテルは蔦温泉のように柱もかたむいていないし近代的な設備をほこっていた。

風呂は今までのうちでいちばん良かった。長い階段を下ると川に面した岩風呂があり窓から脱出すれば川を泳げるようにもなっている。十和田で泳いだM君が得意のクロールを披露したのはいうまでもない。

晩飯後、哲ケン、佐藤、臼井などと散歩に出かけた。道端に腰をおろしていろいろの話に花を咲かせた。（まじめなお話だったヨ）

東北の夜はひんやりしていて気持がよい。ホテルの方からは歌声が聞こえる。サッカー部の連中だ

ミーヌロ　エーのエ　FORME

ヘミヌを歌っている。美しい声だ

東北の空にすいこまれていった。

明日はもう帰途につく。楽しい楽しい旅行だった

（阿部茂記）

九月二日

『作並ー仙台ー上野』

七時起床。もう旅行最終日である。昨日までは今日はどこへ行って何をして！！と旅行を進めていくといった感じだったがもう今日という今日は家に帰るという気持でいっぱい。朝食後エネはへったがおみやげがふえてかえって重くなったカバンを荷作りしてれ時、作並温泉に別れをつげた。

一時間後バスは仙台駅前に到着我々は重い荷物をしょってプラットホームに入った。土曜日のせいかレジャーを楽しむ人々でいっぱいになく混んでいるようである。

そこえ駅屋のごとく現われた男彼こそ仙台駅名物の〇〇駅員さんメガホン片手に客を誘導する所などはなれたものサッカー部の召集なんてけちなものではない。目がねをかけたいかにもまじめそうな人。声は早稲田大学応援部出身かと思われるほど大きく、しゃがれている所などは何ともいえない魅力。ハスキーボイスで何やら言いはじめた。

「みなさん長い御旅行おつかれさまでございます。まもなく列車が入ってまいります。五両編成ですが後の二両はみなさまの為に用意致しております。数は一六八ありますので充分すわれると存じます。どうぞおしあわせに順序よく御乗車下さい。ここまではありきたりだがこの後がよい。

「御乗車の際は座席を選ばず前から順に席について下さい。」

なにをぬかすと思った時、

「みなさん、長い旅行さぞ楽しかったことでございましょう。今日はみなさんにとって最後の列車です。席にもしすわれたとしても仲のいいお友達同志がいっしょでなければ楽しさも半減してしまいます。なるべく仲の良い人同志同じ席にすわれるようにいたしましょう。おたがいの相談によってより楽しい旅行ができますように。御協力をお願いします。」

大きな拍手がわきおこった。だがその人は高ぶることなく静かに頭を下げて立ち去っていった。そのひき際のあざやかな事、仙台のヒーローであった。

東北大の先輩が数人僕たちに会いにきてくれた。残念ながらサッカー部の人には会えなかったが。校長、ウル子等と何やら話をはずませていた。松田は時間と金をもてあまして東北にきてから十五はい目のソバをつるつるやっていた

出発すると往きには遠いと感じた東北も帰りにはみるみるすぎていく。僕は清水、木下、大石たちとトランプに興じた。他の連中もこれが最後と少ない エネをしぼり出して大いにわめいていた。やがて列車は山の間から広い関東平野にはいり、だいぶ黄色みをおびてきた稲の中を一路上野へ向った。

仙台出発から大時間ちょうど一週間前に出発した上野のホームへ汽車はすべりこんだ。数々の思い出を作ってくれた楽しい修学旅行十和田の美しさ、奥入瀬の清らかさ他さまざまのものの感動もまだおさまらないうちに、その感動を心の奥深くしまいこんで皆三々五々に家路についていった。

（市村 俊一 記）

丹沢登山及遊日歩木乃記

十一期　宮　坂、成　宮

私は山がそこにあるから登るのだ。　（マロリー）

一九六一年七月三十一日我々サッカー部のモサ連中は他の参加者を圧倒しながら平塚に集合した。高一ムーチン、怪人、伊東、伊藤越智、中川、樋口、高二吉川、成宮、葉山、宮坂。バスで秦野へ。

秦野で病気の人（金欠病）は蓑毛へ。金のありあまる又ズウズウしい吉川成宮宮坂はヤビツ峠へ各各バスで。とにかくすごい道だ。ヤビツで再び落合って小屋へ行き慣れた下り坂を一一。ウグイス（K2のある者はホトトギスという）の声がする。諸戸で昼メシ。少し行くとなつかしのW・Cと書いてある美しい家が沢の向ふにある。

そのそばを通って丹沢ホームの前を通り目的地山小屋。遠くから見ると何やら小屋の前に光る物体が二つうごめいている。何と天狗さんとウェーバー師の頭。ヤットついた。水をがぶがぶ飲む。K2連はさっそく三階を占領皆より先にくつろいでしまった。夜トン平の隣りに寝た塚田先生トン平があばれるというのでロープを持って寝たが一晩中寝むれなかったようだ。

一九六一年八月一日

朝トン平塚田先生吉川成宮宮坂三階で大あばれ。成宮が一番やられた。夜になって寝る時ウエーバー師は塚田先生もふくめて我々に「今朝はうるさかった」と注意なさった。昼間塔から丹沢を山歩きとてもしんどかった。頂上に出ても雲

又雲。何も見えないし、寒い。

帰りはとても激しい下り。足がゲラゲラ笑い出す。（ソンナ事はないでショウガ）林道え出て薪を拾いながら帰った。

小屋についてから沢で泳いだ。とても気持がよかった。（註、宮坂君は、沢で泳ぐなが海で泳ぐよりよいらしい。ナンセ浅いからオボレル心配がないからネ！）

夜は天狗のお化けの話。ーKエXΔ君はこえを聞いて……。

（宮坂記）

三日目

昨日、疲れたためか、よく寝れた。今日は、午後から展望台に行くことになっていたので、午前中地図の説明があった。昼飯後二十人位が展望台に行くことになった野沢先生を先頭に小屋を出発した。石橋の手前を左に折れて山に入っていったが、早速道を間違えてしまった。登りは大分急であったし、よくすべる所も数ヶ所あった。又谷から恐しく強い風が吹き上げてくるところもあった。途中しかの足あとが沢山あった。展望台からは、塔ノ岳は雲がかゝって、見えなかったが、小屋や秩父連山は、はっきりと見えた。天狗さんは、「こういう所では、こうやって登るといんだ」と言って四つんばいになって、しかの歩きかたを見せてくれた。丹沢ホームで手を振っているのがよく見えた。一息ついてから下り始めたが、行きに比べるとグット速度が増した。丹沢ホームで西川さんに会った。天狗さんは彼から人参をもらって、洗いに行った。その皮をむいてそのまゝもぐ〳〵と食い始めた。

小屋に帰って少しすると今晩のエネ当が、発表された。僕を入れて七人である。その内六人は二人づゝ三組に分れてホットケーキを焼くことになった。旨い者には、ジュースを飲ませてくれるそうだ

前の組は皆まっ黒だったそうである。僕は宮坂と組んだ。もう差がついたなどと皆勝手な事を始めた。味より色をよくしようと必死である。その結果は上々であった

ガマさんも、なか〳〵良い、と言ってくれた。又その余ったのを食えるというのも魅力である。ジュースは飲ませてもらわなかったが、ジャム、あま納豆をつまみ食いした。以上秘密である。

今晩のエネ大会は、エネの少ない大会である。

歌、パントマイム、詩吟等色々と行われた。我々三班は、若者よ山の大尉。若い力等活気のあるものを歌った。

四日目

今日は、起床前からゴタゴタしていた。葉山に、足をしばられているのに気がついて目がさめたのである。葉山はいい気になって、グイグイ引きしめている。痛さにたえかねて悲鳴をあげても、周りの者は例のごとくケラ〳〵笑っているだけである。宮坂ともノンプロけんかを2番とった。葉山と越智は今日帰るのだそうである。

吉川は、葉山がいなくなるので喜んでいた。これは彼の寝相が非常に悪い為である。我々が飯をたいている時、彼等は小屋に別れを告げた。今日は、沢アルキである

ゲヤキ沢に行くんだそうだ、その為わらじが給されたゴミための横の小路を林道へと出た。林道をテク〳〵歩いている途中重大なことに気がついた。それは弁当を忘れたことである。僕にとってこれほどショックなことはない。

結局宮坂、吉川両君から分けてもらうことになる。沢のぼりの途中、小さな滝を登った時、KI早川君滝つぼへどんぶりことやってしまった。彼は、代わりのトレーパンを持って来ていたそうだ。

これから急になって面白そうだなと思った所で昼飯、もうこれ以上登らないそうである。飯を食べている最中、下の水たまりに何かきみようなものがおよいでいる。

吉川と二人で「いもりかな、いや腹が赤くない、サンショウウオかもしれない」などと話しているうちに、宮坂が取りにいった。

気味悪るがってなか〳〵つかまえない。天狗さんの所へ見せに行ったら、やはりサンショウウオだそうだ。宮坂は皆んなに見せに行く途中、すべってにがしてしまった。帰りはおとといと同じ道を通った。小屋に着くとだん〳〵空が暗くなってきた。夕食後はげしい雷をともなった夕立が来た。キャンプファイヤーが心配になったがKIの諸君雨がやむまでと大声をはりあげて、ややHな歌を歌ったりしていた。小雨の降りしきる中で、キャンプファイヤは南れた火にあたっている上レインコートを着ているのだから不快指数百一位である。空では雷が光っているキャンプファイヤーはやはり晴れ

た日の方が何倍もいい。
今晩は葉山の代わりに、西川さんが吉川のとなりに寝るそうだ。彼も自から寝相が悪いと言っていた。

五日目

今日は、最後の日である。朝からぐづついた天気である。吉川はやはり西川さんに悩まされたらしい。飯の後、怪我、病気組はすぐ出発した。我々はヤビツをこえて帰ることにした。掃除の後、かえり仕度をして、小屋の前に集まった。とうく小屋に別れねばならない時がきた。霧雨は、別れを惜んでいるかのように降っていた。

物見峠を越えていく組が先に出発した。我々もそれに続いて出発した。雨のしとくと降る中を。

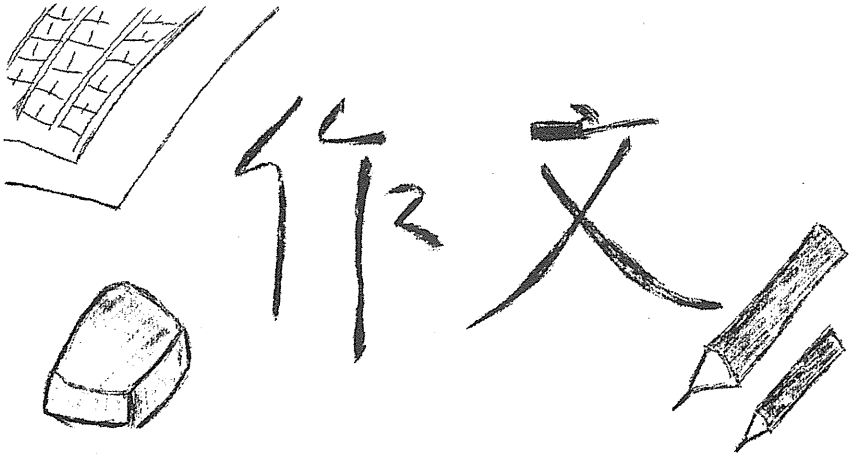
サヨウナラ栄光ヒユッテ、サヨウナラ、又合う日まで！

～～～ The End ～～～

成宮隆夫

洒落

はらがヘルシンキといったら、ナンキン豆をウィーンと持って来た。
そんなにイランといっても、ロンドン持って来た。
それをみんなタイらげたら、頭がポーランドになってしまった。



男らしいやつ

十一期　宮坂　研一

私は男らしくないやつは大キライだ。私は今「私」という言いかをするのもいやだ。「オレ」と言いたい所だが、君たちに対し失礼にあたるからやめておく。

私はおとこらしい人が大好きだ女々しいやつはキライだ。幸いサッカー部には男らしいやつが多いので助かる。しかし、時たま、男らしいやつでもちょっとした所で女々しさ、腰の弱さを見せたり、元々あるいはこの頃女々しい素振りをするやつを見ると、なじってやりたくなる。その場から飛び出したくなる。

次に私が男らしい人を考えると時々ダットすることもある。まだまだ男らしくはないらしい。

男らしいやつは　点ではあるいは美点として特長として、大ざっぱさ、ある程度の豪傑さを持っている。だから、私も、ごすねいな言葉も、言葉使いもきらいだ

手紙等もなるべく、簡潔に、歯切れよく書くのが好きだ。そして文人ぶった書き方、おとなぶった文がきらいだ。ダッシュのある号の最後にのっている文はその人にはすまないが、書きすがおそろしく気にくわない。まわりくどいごてごてとした言い方、同じことを何度もちがう言い方で述べている。ある人の年賀状も気にくわなかった。普通に話していることばで書く方が親しみがあっていいと思うので、少しは丁ねいになるができるだけ普段の話し方のとおり

の言葉で書こうとしている私の所にいやにあらたまった調子で、「…しましょう」とか「…ですね」等書いてあると、がっかりする。

練習をさぼるやつもきらいだ。私も一回さぼったことがあるが、とにかくきらいだ。女々しいから誘惑に負けて、練習に来ないやつは男ではない。男は強いものだ。

特にサッカーマンたる者は、いかなるスランプに会うとも、調子が悪くてもへつまりスランプの時である。コリヤシャクダッタ〜いくら帰りたくても最後までやるべきことをやる。これこそ真のサッカーマンであり、実に真の栄光生である。何だか誰かさんの調子に似て来たが、とにかく、やるべきことをやろう。練習に出たらファイトを燃やし、出られないなら声をかけてファイトを少しでも出させてやろう。

ザ・ファミリオブサッカー。つまりTHE FAMILY OF SOCCER、つまり大家族サッカー部、サッカー部一家として、一つの家族の如く親しく、楽しく、家長にあたる部長、おやじの主将、おふくろの副主将以下K3から中一まで仲よく、団結してサッカー部を家族、家を思ふのと同じ愛情をもって育て、栄えさせよう。何だか始めの題とは少々違って来たが、サッカー部こそ我が部である私にとって、サッカー部の喜びは私の喜び、悲しみは私の悲しみ、衰退は私のものとしてじかに感じられるのである。誰でもK2になり、主将、副主将になれば感じる。何とか部を立派にしようと努力し、皆が協力してくれないとまったく泣けてくるし、中三が二位になったといえば喜び、練習に出てくる人がいなければ、自分が病気になったよりも悲しい

サッカー　サッカーであけくれるといった感じになることもある

とにかく、部の栄えは、部にとって学校にとってアールイハ、日本にとってよいことであり、実に個々の部員にとってもよいことである。そのためには部員全部が実に、男らしくなければナラナーイ

私は実にそれを言いたかった。

サッカー部員たる者は男らしくなろう。意志強固に、立派な人に全員操行優をとるくらいに立派な部になろう。

聖光との練習試合

十三期　渡辺浩

五月四日に聖光と試合をした。三日は休み五日も休みその間の四日も休みだったのにつぶれてしまった。それが残念だったがやっぱりやった。

集合場所は横浜駅東口だった。小島氏が十五分あまり遅刻、バスと市電に分乗して行った。

天候は小雨、後雨。着いてまったく驚天した。その校舎のすばらしいこと。五階建のビルディングが地と空を制するがごとくそいりたっていた。ついた時彼等は勉強をしていた。先生が「君達授業は？」と不思議がっていたのは愉快だった。すばらしい講堂のわきのロッカールームに案内されてそこで着かえた。このロッカールームはなにかの試合に来た他の学校の為のものなのだそうだ。そしてその奥にはシャワー室がズラリとならんでいる。もちろんお湯のである。

そして外へ出た。運動場はきたない。校舎と対照的だった。校舎から運動場への階段には聖光のやつらがかさをさしてすわっている。ヒマ人が多いなと思った。練習中にぼく達が失敗するとワーワー言ふ。しやくなやつらだ。そのうちに普通の授業のあとの補習が終ったとかで彼等がでて来た。デカイでかい、ジョージ級がずらりと並んでいる。しかも彼等はみなトレーパンである。そして時計をしているやつもいれば、バックルのついたバンドをしているやつもいる。まったく度肝をぬかれた。聖光に来てから度肝のぬかれっぱなしである。試合が始まってまたぬかれた。そのプレイのひどいこと足をガンガンふむのである。

まったくシャクな話だった。試合は勿論ボーコでいたぶいた。

「ありがとうございました。」ぼくたちはこういった。彼等いわく。

サンクス！　頭に来てしまったお湯のシャワーを浴びた。快適快適「聖光に一つでもあったらなあ。」と話し合った。校舎をでたらもう真暗だった。近くのラーメン屋で反省会をした。

外でしきりに消防自動車のサイレンがなっていた。

（附記、最近体育館のすみに水のシャワーが↑できたそうである。　水のである。）

大いなる夢

十三期　相川亮一

X君は十三期生今は高二でサッカー部の一員であり、センター、フォワードをしている。ところでこのチームは、技術の方は特筆すべきでもないのに、勝利の女神によっぽど気にいられたらしく、中学でも良い戦績を残し、高校でも関東大会に二位となるなどなかなかのかつやくぶり、さて今まで練習してきた技術の総決算がこの全日本選手権である。予選では宿敵湘南と大泉を破り、晴れの舞台に登上こ、でも苦戦をしながらも、準決勝で清水東までも破りいよいよ今日の決勝では関東大会で惨敗した浦和市立とあたるのである以下はその時のもようを物語風につづったものである。

一、予想では、

X君のお父さんはテレビのスイッチをいれた。

アナウンサー（竹越氏に）どうですか。今日の予想は、

竹腰氏「そうですね、すいせいのごとくあらわれた栄光学園ですが、技術、体力とも浦和にはおとりますね、まあ十中八九は浦和のものでしょうね。見所といえば浦和の名手、CFの山田を軸とする個人技対栄光のファイトのぶつかり合いでしょうね。」

最初からまったく非観的であるだがこれも無理はない、X君さえも勝とうとは思わず、たゞ立派に敗れようと思っていた。

二、とにかくやって見よう

スタンドもグラウンドも一瞬沈黙した。両チームは礼をして各ポジションに散っていく。みんなの顔は青ざめている。三月の暖かい陽がみんなの顔にふりかかる。

X君はあの関東大会を思いだす浦和のごつごつい顔、すばらしいキックやダッシュとくに大学級といわれるCFの山田の精みんな顔つきを、ハッと我に返る。ピーッとふえがなり山田がボールを前にだす。するとインナーの早川とかいう奴がいきなり左でひっかけ右ウイングにわたす。ウイングのすごいドリブル、そしてすぐインナーにわたす。だがそれをだまって見ている様なバカなことはしない。CHの松崎はすぐこれをとってX君にパスした。良いパスである実に、

だがボールは彼の足に来なかった。

超人的なダッシュである。浦和の叶塚越に見事にカットされたのである。塚越は誰もあたろうとしないのをさいわいにどんどんドリブルしいきなりセンターリングをあげた。栄光の緑と白のたてじまのユニホームと浦和の赤のジャージが、空中でぶつかった。

そして栄光のキーパーが飛びだしてきた。「でるな」乙君が言った時はもうおそかった。CFの山田のヘッディングはキーパーの頭をこえバアーをかすって、ネットをゆらした。

開始後わずか二分である。しかも浦和は横綱の貫禄というのか、これがあたりまえというような顔でムキあげる。乙君は下をむく。

だがCH松崎のFWエイーという声で顔を元気にあげる。前よりは気が楽になったようだと、彼は思った。しかしこちらの気が楽になったからとて浦和の攻撃の手はやまない。正確なボレー、鋭く飛ぶヘッド、見事なたてパス、総て無駄というものがない。みんなロングパスだから下WHは戻らない。加えてサイドハーフ、時にはセンターハーフまでが攻撃に参加するからたまらない。栄光FWは、早いつぶしにあう、栄光ゴール前は大盛況である。そして開始後十分両度山田がウイングからのパスを決める。

キーパー必死のセービングなど問題外の様な強いシュートが決まってしまったのである。浦和は、二点目が以外と手間取ったという様に肩をいからせて引きあげる。

だが、このままではなんのために五年間、サッカー部の飯を食ってきたのかわからない。二点目をいれられてからの各プレイヤーの動きは、まさにつかれを知らない精巧な機械の様であった。

開始後二十分、ウイングの山口が敵フルバックにケヤージされ栄光はフリーキックを得た。乙君はまさに無我無中だった。小児マヒにかかったのかと思ふくらい、足がふるえた。だがとにかくけった普段なら、なんでもない距離だが今は別だった。ボールは孤を えがいてゴール前を横切った。肉のかたまり同志が空中でぶつかる、だがこれは栄光側に軍配があがる。

ついに一点、強豪浦和から一点を取ったのである。だが相手はこんなことは、まぐれだといわんばかりである。

やっと前半が終った。皆もうほとんど力を使い果している位だった。コーチの注意もてんで聞こえない。その間にはやエンドラインーエンドがすぎ、後半開始である。

前半二対一でまあまあというところ、後半開始すぐロングパスのおうしゅうから、X君が二点目を決め、ついに同点となった。ここで調子づいたM一X〇は、堂々互角に浦和とわたりあった。こうなるとM一X〇も必死である。敵インナーの放った中距離ショートをセービングヘッドで返すなど、バックもファイト倍増、一方浮足だつ浦和バックスの足もとを抜くパスが良く通りだし、再三、敵ゴールをおびやかすが、そこは日本一良くゴールを守る。

三、決死のスライディング

後半互角にわたりあってもみあっているうち、いっしゅんマークをおこたり、敵ハーフからのパスを受けたウイングの独走を許してしまった。CHの松崎はその時CFの山田をマークしていたのだが、敵ウイングが完全にフリーになって真中へはいってくると見るやいなや、すばらしいダッシュをきかして、敵ウイングへ追っていった。

しかしそのダッシュさえも追いつけないと、誰もが思った。

彼は、これ又一対一の勝負をつけるが如く前へとびだしてきた。だが、敵ウイングは、このキーパーの動きの逆へシュートをした、と誰もが思った。しゅんかんCHの松崎は実に頭からスライディングを敢行ウイングの足許へとびこんでいったのである。ものすごい音がしてボールは遠くへころがった。

だが松崎はおきあがれなかった

やむを得ず退場である。しかし彼の負傷は無駄にならなかった。

それから、しばらくして笛がなり試合は延長戦にはいるめであった。

四、夢のロングシュート

延長の前半もM一X〇、CHをぬいたので押されっぱなしながらも終り後半もM一X〇、CFに近く敵味方共にあせってきた。そうなると敵はすごい、ついにX君も敵CAのアタックで倒れ足をいためてしまった。彼はエンドラインーエンドの上で、天をあおいで寝てしまった。一点の曇りもない青い空を見るとX君は、ここから逃げだした

いくらいだった。味方は今敵ゴール前で、最後のこうげきをしていた。観客が、ワーアとさわいだので、彼がたちあがってそちらを見ると全員守備の様な形の浦和の足許をぬいて、こぼれ球が彼の方へコロ〳〵ところがってきたのである。なんのくせもないし、丁度良いスピードの球であった。

Z君は足のいたみなんかはふっとんでしまった。彼は完全なフリーである。ぐんぐんボールが迫る息をとめ、思いきり飛びこみ、思いきりふった。「やった。」ボールは孤を画き、ゴールの中へ吸いこまれていった。と同時に笛がなった更に続いて、第二の備。

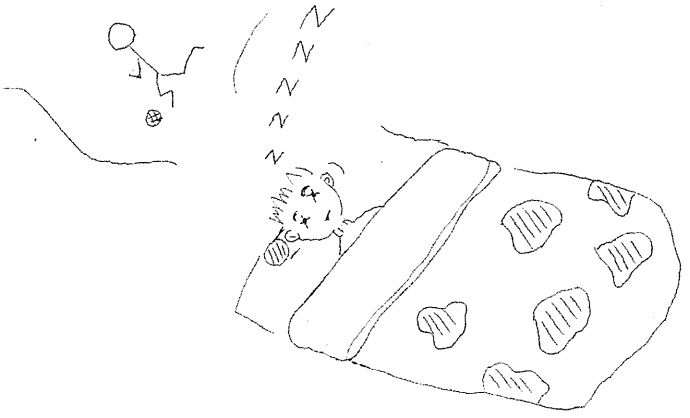
「勝った。」彼はヘタヘタとそこえすわりこんだ。

以上まったくの夢物語で名前は電話帳から取ったものである。

一中に敗れた、すぐ後でこういうバカ話しもどうかと思ったが、まあ落語を聞く位の気持で読んでもらいたい、しかし、この話が絶対夢物語とは誰も断言できない。

十三期全員一丸となって、この夢物語を実現させる様がんばりたい、それにはこのままの状態でいってもだめであろうと思ふ・先輩が世界を目標にしろとおっしゃったがせめて、日本一位にはなりたいものである。

〈　こめまずく、かつ、ひどい文章によく我慢してくれたことを最後に感謝します。〉



夏休みの生活

十一期　吉川　威

今年の夏、私は例年になく忙しい毎日を過した。

先づ七月後半のサッカー部合宿、月末より八月初めの山小屋合宿、前半の補習、中頃の国体予選前の練習と、予選、八月末には後半の補習及び中学の指導という有様で家に居る時より、外出している時の方が、ずっと多かった。その為今年は殆ど泳ぐことが出来なかったのが、非常に残念である。

しかし、それだけに、この夏休みは、私にとって忘れる事のできないものとなるであろう。この休みの数々の出来事のうちいくつかをあげて見ると、一、合宿によって、K一とK二の親睦が深められた事、二、昨年K二の合宿に参加した山小屋の合宿へ、今年はK一のそれに参加した事、国体予選で宿敵鎌倉学園を、準々決勝に於て破った事、KIKⅡの信者の、海の家での鍊成会に参加した事等があげられるが、このうち、山小屋へ行った時の事を書いて見る。

昨年、宮坂と共にK二に唯二人だけK一として加わった山小屋へ皮肉にも今年はK一と共に参加した。結局、私は、他の高二の生徒と同じようなところへ行くことが出来たわけである。もう何回も来て、かなり勝手を知った我々は、若い（といっても一年違い。）連中と一緒になって楽しく遊び回った。

今年は、丁度体の具合があまり良くないので、沢歩き以外は全部チンデンしてしまった。

しかし、チンデンも亦楽しからずや、である。私の他に常時チンデンするものが数人いたが、その連中と、いつもトランプに興じていた。よくやったのが、ノートランプメナポレオンであるのナポレオンは○先輩の得意なものであって、昨年、高三の時我々と共に参加した彼は常時このナポレオンをやっていたっ！彼はあまり強くなかったが―。私はナポレオンをやりながら、ふと彼を思い出した。

この山小屋の合宿の時、私は、往復の山道と、寝る時に、非常に悩まされた。特に悩まされたのがトンペイ君のネゾウの悪さである。

これには、塚田先生もまいってしまって、三日目の夜からは、とうく逃げ出されてしまった。

防波堤の役割をしていた彼の逃

亡によって、私がこれまで以上の苦境に立たされたのはいうまでもないであろう。

山を下る時私は考えるともなくこんな事を考えた。百年後の栄光生も、小屋へやって来るかも知れない。そして又、我々のような生活をくり返すかも知れない。百年後にも、第二の天狗さんが居られるであろうか、又〝ママ〟さんも一。

今年で多分栄光生として、夏休みを楽しむのはおわりであろう。

この最後の年(?)は数々の思い出があったが、私は大事な時を十分に有意義に過さずに終ったように思はれてならない。

(完)

＝特別寄稿＝

詩 〝鏡〟

X氏

一、

鏡!一人間的な、余りに人間的な!

二、

〝人間的な〟とは、ニイチェの所謂超人的でないという意味である。

〝動物的な〟ということでは勿論ない。

三、

人間が何時の時代から鏡を愛する様になったかは、余り確かでない。

然しそれが人間的感情の芽生えと時を同じくする事が相像に難しくない以上、或は智恵の実と同じ位置から人間は鏡を知っていたのかも知れない。

四、

〝心貧しきものは幸なり!〟

蛇がアダムとイヴに教った事の中には、鏡の悪徳があったかも知れない。

五、

この蛇は勿論現代にも生きている。

六、

現にある時、蛇が私に教えて呉れた。

〝青年が大人になった時、彼は第一に鏡を買いに行くものだよ。〟と。

七、

或る時又蛇は私に言った。

〝男女共学の成果は鏡の売れゆきで測ることが出来る。〟

と。

八、

諸君！蛇の巧言に重ぜられてはならない。

蛇は諸君に鏡の効用を力説するかもしれないが、諸君は鏡の真実らしさに惑わされてはならない。

九、

諸君！試みに右の眼をとじてみよ。鏡は左の眼を閉じるであろう。

十、

私は鰈の論議を聞いたことがある。彼は人間が直立して生活することを不興げに批判した挙句、鏡が上下反対であるといって憤慨した。

十一、

鏡は人間にとって左右反対であるのに、鰈にとって上下反対であるのか。

これは鰈の妄執であるのか、又鏡の魔術であるのか。

十二、

鏡は常に不実なる初答者である。諸君は如何なる立場で之に対するか。人間の立場であるか。

十三、

見解の相違は常に上揚されねばならない。

十四、

鰈の不明を論ずる前に、諸君はまず諸君の見解を明らかにせねばならぬ、鏡の不実を批判する前に諸君は先ず諸君の妄執を捨てねばならぬ。

十五、

諸君は鏡の背後の実在に期待してはならない。

諸君は鏡に直実を求めてはならない。

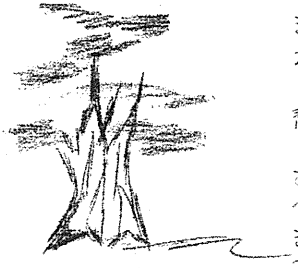
十六、

鏡は直実を与えない。それは常に諸君自身の内に求むべきもの、創り出さるべきもの、そして育て上げるべきもの！

十七、

"男女共学の成果は素晴らしいものであった。"と或る時又蛇が私に語った。

喜ぶべきか！悲しむべきか



1961年度(中学校 高等学校)中間成績(10月1日現在)

中学校

月日	会場	相手校	種類	得失点	勝敗	勝率
2.18	栄光グ	横須賀学院中	練習試合	8－0	○	1.000
4.29	相手校	六角橋中	〃 〃	3－1	○	1.000
5.4	〃	聖光学院中	〃 〃	8－2	○	1.000
5.20	栄光グ	藤沢一中	〃 〃	4－2	○	1.000
6.17	金沢中	岡村中	県選手権1回戦	7－0	○	1.000
6.24	浅野学	松本中	〃 〃 2 〃	5－0	○	1.000
6.25	保土ヶ谷	真鶴中	〃 〃 準決勝	3－1	○	1.000
7.15	〃	藤沢一中	〃 〃 決勝	0－1	●	.875
9.23	栄光グ	金沢中	練習試合	11－0	○	.889
9.30	相手校	蒔田中	〃 〃	10－0	○	.900
通算			県下才二位	59－7	9○1●	.900

高等学校

月日	会場	相手校	種類	得失点	勝敗	勝率
2.1	相手校	湘南高校	練習試合	4－0	○	1.000
2.12	県営クレー	法政二高	県新人戦1回戦	1－0	○	1.000
2.19	〃 〃	鎌倉高校	〃 2 〃	3－1	○	1.000
2.25	〃 〃	日大藤沢 〃	〃 準決勝	3－2	○	1.000
2.26	〃 ローン	横浜商業 〃	〃 決勝	4－0	○	1.000
4.15	栄光グ	鎌倉学園 〃	練習試合	2－4	●	.833
4.30	相手校	鎌倉高校	〃	3－0	○	.857
5.14	県鎌グ	小田原高校	関東大会予選2回戦	3－4	●	.750
7.16	栄光グ	横須賀学院高校	三浦大会1回戦	7－0	○	.778
7.16	〃 〃	逗子高校	〃 〃 決勝	8－1	○	.800
8.18	湘南グ	〃 〃	国体予選1回戦	8－1	○	.818
8.19	〃 〃	多摩 〃	〃 〃 2 〃	9－0	○	.833
8.20	県営ローン	鎌倉学園 〃	〃 準々決勝	4－2	○	.846
8.22	〃 〃	湘南 〃	〃 準決勝	0－6	●	.786
9.30	相手校	翠嵐 〃	練習試合	5－1	○	.800
通算			県下才三位(国体) 〃 才一位(新人戦)	64－22	12○3●	.800

編集後記

十一期編集責任者 吉川 威

またも、おくれてしまって全く申し訳ありません。本来は夏休み頃又は九月初めに編集するものらしいのですが、先号の原稿の集まり具合からいってそれは不可能に近いと思われたので、まだ不安ではあるが、夏休みの間に皆さんが原稿を書く時間が十分にあると思い、九月半ばを締め切りにしたところ、不幸にも先の予感が的中し九月末になっても、中二、中三、高一、高二の人達からはあまりたくさんの原稿を得ることはできませんでした。（勿論一人で二つも三つも書いてくれた例外的な人も有ったのですが。）ですから、毎度同じ事は言いたくないのですが、このおくれを原因は、やはり部員の、非協力的なことが、その大半を占めるものなのです。

私達編集は、この記念すべき、「第十号」を、立派なものにしたいと思って計画しておりましたし私個人としても、この作品には大きな夢を抱いていたのですが、この夢は見事に破られてしまいました。夏休み前、夏休み中に頼んで回ったのですが、原稿の半分以上は、先輩と、高三の方たちの書いて下さったものなのです。

前を見ればわるでしょうが、高三全員の書いて下さった「十和田行」その他がなければ、この号を出すことはとてもおぼつかないという有様だったのです。書く暇がないと言った人もありましたが、卒業を控えた高三と自分をどちらが忙しいか、よく反省していただきたいと思います。又、たった一つの原稿を書けば大威張りで居ることのできる君達と、それ等を清書し、編集しなければならない編集員達の事も、是非考えていただきたい事の一つです。君達のうちの誰かは後に編集者になって、このような苦労をしなければならないという事を考えたら、原稿の一つや二つ、全く簡単に書くことができると思いますが――――。

以上の事を読んで、〝この馬鹿が何を言っているんだ〟と思ふ人もあるかも知れません。しかし、もしも、この拙い文に対してでも心に感じるものがあった人は、今からでもおそくありません。私が編集する〝DASH〟は今号で終りですが、これからの編集者に対

して、積極的に協力することを彼等に代ってお願いします。

今まで私は、皆さんに文句をいってきましたが、決して文句ばかり言うわけではありません。

今号が、つまらぬものに終ってしまったのは、私にも大いに責任があるのです。この点私は、心から皆さんにおわびさせていただきます。今号で、あまり試合のことに触れないで一特に中学の場合一終ってしまったのは、ちょっとした手ちがいによるもので、全く私の注意の至らなかった為です。

この為、今回は興味がうすいだという人も多いことでしょう。全く何と申したらよいか……。

唯、「申し訳ない」の一語で（これでは言い足りないのですが）すべてのおわびに代えさせていただきます。

ここで第十期編集長であった中前さんが八号に於て言われた言葉を、のせておきます。

"ダッシュは編集員が
作るのではない。
皆が作るのだ。
わかったか!!

皆さん、どうかこの言葉を忘れないで下さい。

皆さんと共に、この"DASH"が限りない発展をして行くように……。

DASH 第十号

昭和三十六年十一月　十日印刷
昭和三十六年十一月十三日発行

発行所　栄光学園蹴球部

編集員　吉川威
　　中川謙

美術担当　越智信利

印刷　光有社　電(70)八〇八〇